

第8回熊本大学 東光原文学賞作品集

2016年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library



◆ 優秀賞 ◆

海の泡に消える

黒瀬 優

君の部屋

伊藤 祥太

リグレット

佐藤 稿介

天空楽園 Y is N's doppelgänger.

眉口 心一

第八回熊本大学東光原文学賞作品集

第八回東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 山尾 敏孝 / 4

第八回東光原文学賞作品集の公刊にあたり

優秀賞

海の泡に消える

黒瀬 優 / 7

(工学部機械システム工学科三年)

優秀賞

君の部屋

伊藤 祥太 / 44

(文学部文学科四年)

優秀賞

リグレット

佐藤 稿介 / 66

(文学部文学科一年)

優秀賞

天空楽園 Y is N's doppelgänger.

眉口 心一 / 101

(工学部機械システム工学科四年)

選考を終えて

西山 忠男 「東光原文学賞総評」 / 137

高峰 武 「講評 書くという動機」 / 143

坂口 至 「講評」 / 146

第八回東光原文学賞作品集の公刊にあたり

附属図書館長 山尾敏孝

今年も東光原文学賞の作品募集とその選考結果の発表時期となりました。本年も本学学生である学部生、大学院生および留学生等を対象としました「東光原文学賞」の作品募集を実施しました。附属図書館の事業として開始して本年度で第八回目を迎えます。熊大生の言語力向上と創造力豊かな学生の育成、附属図書館の利用者の増加など地域社会における文学・文化活動の一助になることを趣旨とし、小説作品の投稿を募りました。

今年度の応募数は十四編で、応募者の内訳は次のようでした。

文学部 六編、教育学部 一編、理学部 三編、工学部 四編
学年別には、一年生五名、二年生一名、三年生五名、四年生以上三名

応募数こそ昨年の十二編を上回りましたが、応募の学部や学年にも偏りがあり、大学院研究科からの応募は今年もゼロでした。さらに、今年度の作品の水準が例年に比べて一様に低く、優秀な作品四編を選びましたが、大賞に該当する作品がとうとう出ないという非常に残念な結果となってしまいました。選考委員の先生方からは、「東光原文学賞」のあり方について見直しの時期にきているのではないかとの意見や、作品投稿に向けての学生への支援など附属図書館としての活動についての意見が出されました。今後の図書館の課題として取り組みたいと思います。



また、入賞された皆様、誠にありがとうございます。そして、惜しくも入選できなかった方には、ご寄稿していただきましたこと厚くお礼申し上げます。選考委員の講評等を参考にして、さらに精進して再度挑戦していただき、作品の投稿に繋げていただきたいと願っています。

平成二十年度に始まりました本文学賞について、データで振り返りますと次の通りです。

- 第一回…二十九編 (学部 二十一編・六学部、大学院 八編・五研究科) 大賞一、優秀二
- 第二回…二十編 (学部 十九編・五学部、大学院 一編) 大賞一、優秀三
- 第三回…二十五編 (学部 二十三編・六学部、大学院 二編・研究科二) 大賞一、優秀三
- 第四回…二十一編 (学部 十九編・六学部、大学院 二編・一研究科) 大賞一、優秀四
- 第五回…十四編 (学部 十三編・五学部、大学院 一編) 大賞一、優秀三
- 第六回…十九編 (学部 十九編・七学部、大学院 無) 大賞一、優秀四
- 第七回…十二編 (学部 十二編・五学部、大学院 無) 大賞一、優秀三
- 第八回…十四編 (学部 十四編・四学部、大学院 無) 大賞無、優秀四

今までの応募者の全人数は、学部が百四十名、大学院が十四名です。男女別では、男子七十九名、女子七十五名でした。もちろん述べ人数ですので複数回にわたって応募していただいた学生もいます。学部別ではやはり文学部の学生が最も多く四十八名で、次が法学部、医学部の順となり、学年別では一年生から四年生までの差はほとんどありませんでした。文学賞を設置しました初期の段階から比較しますと、応募作品が減っていることは事実のようですし、学生の方も多少熱が冷めてきたのでしょうか。しかし、

熊大生の作品力、文学力が落ちたとは思いたくありません。きっと、書きたくとも他の用事で忙しすぎて書く時間がないのか、書きたいのであるが作品にするノウハウが不足しているなどの理由も考えられます。

皆様には若さと豊かな才能があると信じています。一読者として小説を読んだ際、これは素晴らしい作品と感じるのは、テンポよく書かれ、描写力がすぐれて読者を引き込み、あっという間に読み終えたい気にさせる作品です。さらに、作者が訴えたい気が明確になっている場合が多いと思います。と言っても文章を書くことは簡単ではないでしょう。授業では習わないことではあります。今までの体験や読書や文献、種々の情報を取り込んでの創作に何度も挑戦し、切磋琢磨して、自分の納得のいく作品に結び付けていただければと思います。熊大生の文学力を大いに発揮され、我々に感動を与えてくれる作品を期待しています。



上段：高峰 西山 坂口
下段：伊藤 石本 山尾 佐藤 濱田

海の泡に消える

黒瀬 優

死のう。

いつものように汚らしく。それでこの場から逃げられる。

大きな欠けた月。その月の突き刺すような青い光。しかし、波と砂は照らされて白く輝く。圧倒的に生命を感じさせない水と砂の世界。そして、その世界を両側のそびえ立つ崖が切り取る。全てから隔離された場所。

ここはいつも変わらない。私の夢の世界だ。

私は現実でここを訪れた時、この海に一目惚れをした。まだ、男の子を一度も好きになった事も無い様な幼い頃の話だ。

そして、唐突に死にたいと思った。この世界において生きている私は異質で、死んで泡になって、この海と一つになれたらと。

家に帰った後もこの胸の高まりから、眠る事は出来なかった。目を閉じるだけで、この景色が瞼の裏を独占する。それほど、私の心に強く焼き付いた。

そして、私はちょっとしたきっかけでこの景色が嫌いになってからも、こうして夢の中で終わらない地獄の様にこの海に閉じ込められている。

死ねばいいのだ。それで目が覚める。

震える足をプライドで抑えつけ、波打ち際まで歩く。波の一撫で一撫でが不快感となり、私の中に打ち寄せる。

間近で見るとインクのように真っ黒な海の中を進む。波は穏やかだが、水面から下は全く見えな。別の世界にでも繋がっている様だ。水の抵抗は無い。ただ、人肌を思わせる生ぬるさが、背筋だけを震えさせる。水が腰の辺りに達する所まで進むと、いつもと同じ事が起きる。

水面がうねり、私を吹き飛ばすのだ。痛みも衝撃も感じないまま、後は地面に叩きつけられて、汚く死ぬだけである。

目が覚めると、街は異様に騒がしい。嫌な夢を見ていた後で、頭に響く。薄い布切れと石畳の組み合わせは、一か月たった今でも安眠を妨げる。

建物に囲まれて角ばった明るい空は太陽が思っていたよりも高い所に昇っている事を予想させた。

足にくっきりとついた石の跡をなぞる。年頃の女の子がこんな状態でいいのかと、意識がはっきりしないうちから感傷に浸る。

水溜りに自分を映し、寝癖を直そうとする。雨は降っていない為、この水はどこから流れて

きたのだろう。水面からは疲れた女性が覗き返してきた。今年で十八になる。自分の事は少女だと思っていたが、この生活を始めて急激に老けた気がする。体も洗えず、洗濯もされていない安物の服しかないが、出来る限り身なりには気を付けたい。

ようやく働き始めた脳が教えてくれたのは、今日が収穫祭であるという事だった。また貴族や王宮の関係者も大勢参加するのだろう。去年までの父の席には誰が座っているのだろうか。

このカビ臭い路地裏を出て、収穫祭のある大通りまで行こう。食べ物か何かをくれる人がいるかもしれない。今、街は浮かれている。

草臥れた鞆を肩に掛け、腰を上げる。薄い布切れは丸めただけで小さな鞆に収まる。今の私の全財産は片手で十分持ち運べてしまうのだ。

大通りに向かう途中、片足の男が路地裏に座り込んでいた。私と同じ物乞いだ。ずっと食べ物を買っていないらしい。見るからに栄養が足りていない。腕を動かすだけでも難しそうだ。

祭りで簡単に食べ物が入るといふのは安直な考えだったのかもしれない。

今は戦争も終わりそうでもないが、ほんの数年前まで王宮から近いこの地域を除き、治安は驚く程悪かった。

赤ん坊の誘拐などもあった。この生活を始めてから知ったが、物乞いが誘拐していたらしい。赤ん坊連れであれば、簡単に同情を買える。

何も知らなかった私は赤ん坊連れの物乞いに食べ物を渡した事もあった。もし、あれが誘拐された子供であれば、私はまふまふと悲しい事件を助長した事になる。あの赤ん坊には悪いが、長い

目で見ると無視をする事が正解だった。

そして、成長し、用済みになった子供は手や足を切られて、捨てられる。大人の男など、どんなに惨めであろうと、同情は買えない。しかし、手や足が無ければ、可哀想だと思った人間が食べ物をくれる。足を切るのは最後の優しさなのだ。

だが、この男は足が無くとも、食料に値する情けは掛けてもらえなかった様だ。それで、治安の悪かった地域から流れて来たが、ここでも駄目だったのだろう。私は年端の行かない女という事だけで哀れんでもらえるだろうか。

この辺りの物乞いは結束が固いと聞いている。集団の方が生きやすいかららしい。しかし、この男は仲間もいないまま、一人で死んでいくのだろう。足も切られ損だ。

大通りまで来てみると、文字通りのお祭り騒ぎであった。

色とりどりの布が頭上に飾られ、どこに隠れていたのだろうと思う程の人で溢れていた。いつもは無いお店が立ち並び、そこから歪な長蛇の列が這い回る。普段は石とレンガの殺風景な通りと同じ所だとはとても思えない。通りは笑い声と様々な食べ物の匂いに包まれていた。町全体がのぼせている。

平和なものだ。まだ昼前だというのに男どもは酒に頬を赤らめくだらな話で大笑いし、子供は子供で家の手伝いから堂々と解放され精一杯羽を伸ばしている。地面に足が付いている人は誰一人としていない様だ。

今年は何程豊作なのだろう。

さらに辺りを見回すと、人ごみの隙間に視線が釘付けになった。明らかに浮いた少女が向かいの路地裏に立っていた。放っておけば消えてしまう様な、弱く儚そうな少女。七歳ぐらいであろうか。色素が無く薄い。肌も髪も真っ白だ。だが、それにも増して存在が薄い。派手な世界にか所だけ空白がある。

声を掛けてみたいと思った。不思議な感覚だ。普段の私であれば、無駄に人と関わろうとはしない。

大通りを堂々と横切る。しかし、誰も私を見ない。各々が羽目を外す事で忙しいのだ。

通りから少し離れると、話が出来る程度の静かさはある。建物が音から守ってくれているのだろう。やはり、大通りよりは居心地が良い。

少女に近づく。少女は私の視線に気付くと、その場から動こうとはしなかった。質素な服装からして、物乞いだろう。警戒心は湧かない。しかし、両手には大量の食べ物を抱えていた。

少しの間話し掛ける内容を考えていると、少女の方から口を開いた。満面の笑みで挨拶をし、持っている食料と一緒に食べようと言ってきたのだ。

「おはようございます」

取りあえずは挨拶を返す。こんな特徴的な子に会った事は無いが、少女はまるで知り合いの様な態度で接してくる。少し気味が悪い。

私の顔をじっと見ていた少女は、私に日記帳を読むように言った。

私は驚き、自然と鞆を後ろに回す。確かに日記帳は鞆の中に入っている。しかし、何故この日記帳の存在を知っているのだろうか。

この日記帳は私の宝物だ。物乞いの中では珍しいが、特に高級品でも文字を書ける事が特別なわけでもない。しかし、幸せだった頃の思い出からあの海の風景まで、私の全てがここに書かれている。他人に見せびらかすような事をした憶えは無い。

不気味だ。しかし、この少女を信じるのであれば、日記に少女の事が書かれているのだろう。「私があなたと出会ったのはいつですか」

分厚く、見た目より重い日記帳を取り出しながら聞く。数年使い込んではいるが、綺麗なものだ。表紙は革で出来ており、子供の時はその大人っぽい見た目も気に入っていた。今となっては私も日記帳と比べられても恥ずかしくない程には成長出来ているだろう。

少女は私の日記帳を嬉しそうに見つめながら、当たり前の様に驚くべき事を口にする。

昨日。これで本当に昨日のページに少女の事が書いてあれば、私は余程疲れているのだろう。日記を開く。ここ一年は毎日一ページ書いている。昔は数日かけて一ページを使っていたが、最近では取まらないと思う事ばかりだ。最後に開いたページだけあって、簡単に開く。

記憶を辿りながら読み飛ばす。どんなに苦勞して書いても、読むのは一瞬だ。しかし、私の視線は最後の文に足止めを食らった。そこには『私はそのアクアという少女としばらく共に生活する事にした』と書いてあった。確かに私の文字で、うっすらと自分で書いた記憶はある。だが、私はこの少女の事は未だに思い出せない。

混乱して、少女と日記を交互に見つめる。昨日の事を思い返すと、午後からの記憶が曖昧である。具体的に言おうと、誰かと会っていたと考えると辻褃の合う時間の記憶が無い。

しかし、私は一人で生きたくてここにいるのだ。利用はしても、共存はしない。その考えを変える程の決断をこうも完全に忘れてしまえるのだろうか。

その少女は私の無言の疑問に答えた。自分は誰の記憶にも残らないと。魔法も信じない私だが、否定する言葉も思いつかなかった。

その少女と久しぶりの御馳走を食べながら話をする。勿論、いつもの拠点にしている路地裏に移動してからである。お祭りの煌びやかな雰囲気は私達に優しくない。片足の物乞いに食料を狙われないよう、通る道を少し変えた。

私の鞆にはナイフなど、生きていくのに最低限の道具は入っている。しかし、わざわざナイフで切り分けられないといけない程のご飯を食べるのはいつぶりであろうか。手の込んだ料理は無く、ほとんどが素材その物であるが、死がすぐ隣にいないというだけで心に余裕が出来る。生に執着するわけでもないが、死にたくもないのだ。

改めてアクアを見つめる。彼女は固いパンと子供らしく格闘していて、こちらの視線には気付かない。

アクアという名の少女は奇妙な体質をしている。彼女についての記憶は一度寝ると完全に消えてしまうらしい。普段なら笑って終わるが、こう体験してしまうと信じるしかない。現に今も目

を閉じると彼女の顔は霧となって消える。白い肌に白い髪。華奢な体。文字にすれば憶えられるが、絵として憶えられない。彼女の為にも、手元にカメラがあればと無い物ねだりしてみる。

しかし、私が彼女と生活を共にする事に決めていたという事実を未だに信じられない自分もいる。

アクアは街が収穫祭で浮かれているとはいえ、簡単に大量の御馳走を貰って来た。子供は同情から色々貰えやすいが、それにしても多い。不思議な魅力を持っているのだ。

だが、それだけで私が生き方を変えるはずもない。一緒にいる事で食べ物貰えやすいくとも思っただろうか。この事について日記は触れてない。

「そう言えば、今まではどうやって生きていたのですか」

私にはぐれて一人で生きる者の方が圧倒的に少ない。忘れられる体質では人と生活するのは難しいだろうが、もっと幼かった時は一人だけで生きられなかったはずだ。

アクアは悲しそうな顔をした。その時点で私は後悔をする。この質問はするべきでなかった。彼女の表情の変化に気付かないふりをして、自分が持ったパンを見つめる。面倒くさい。

しかし、彼女は口を開いた。気付けば一人だった。誰かと生活を共にした記憶は無いと。

「ごめんなさいね。変な事を訊いてしまって。それに、さっきは貴方の事を忘れてしまって」

謝罪しておく。それに対し彼女は責めないと言った。日記帳のおかげとはいえ、今彼女を忘れずにいられるのは私だけだからと。

アクアはただ嬉しそうにしていた。そして、今日から日記帳には彼女の事を沢山書く約束をし

た。

「お散歩にでも行きませんか」

食事を終え、私はアクアに提案した。彼女の体質に若干の興味が出てきた。何か印象深い物があれば憶えていられるかもしれない。

アクアは満腹状態で建物を背に座って休んでいたが、その意図を理解してか、嬉しそうに立ち上がった。既に太陽は頂上を過ぎていた。朝の水溜りも少し小さくなっている。

お金の無い私たちは収穫祭で盛り上がる通りを、遠目で眺める事しか出来ない。しかし、彼女はそれでも楽しいだろうと思った。

少し前であれば多少のお金はあった。着ていた服を売ったのだ。今ならあの値段が適切でなかったと分かるが、力づくで奪われていけないだけ良かったと思うべきだろう。少なくとも、あのお金があれば家に戻るか飢え死にするしかなかった。

私達は片足の無い物乞いのいる道避けて大通りに行く。もしかしたら、もう死んでいるかもしれない。それを見るのは気分が悪い。

裏道を抜け、大通りに出た時だった。痩せた少年が目の前を走り抜けた。左腕が無い。服装と状況から考えると物乞いだろう。最近はず足の無い物乞いが増えた。豊作なのはこの一帯だけで、どこかから集まって来ているのかもしれない。

「嫌な予感がしますね。ちょっと離れましょう」

アクアは不思議そうに首を傾げる。

彼にも死がすぐそこまで迫っているのが分かった。アクアの様に簡単に食料を貰って来られる人間もいれば、なぜだか貰えない人間もいる。さっきの少年は後者だろう。優しさというものは寂しがり屋だ。集まる所には集まるが、集まらない所には集まらない。

おそらく彼はすぐに問題を起こす。物乞いという同じグループに属する私達は近くにいない方がいい。

「泥棒だ。捕まえろ」

誰かがすぐ近くで叫んだ。遅かった。頭を抱える。こちらに出来ない事を祈るが、悪い予感というものは大体的中する。

少年が屋台にあった何かを掴んでこちらに走って来るのが見えた。私達のいる所から十メートルくらいしか離れていない。通りの人間は道を開け、関わらない様になっている。

アクアの手を握り逃げようとした時、通りの人ごみから黒髪の男が少年の前に立ち塞がった。男は少し痩せているが、筋肉もある。

黒髪の男は向かって来た少年を簡単に地面に倒す。少年が片腕だという事を差し引いても、あまりにあっけない。折り畳むという表現が正しかったと思う。私達は目の前で起こった大捕物に固まる。

そのまま男は少年を片手で抑えつける。男の横顔が見えた。整った顔立ちではあるが、左目は眼帯であり、頬に大きな傷もある。戦争に参加していたのだろう。私と三歳程しか変わらないが、

しっかりとした男性だった。

「こいつを連れて行って。僕はオーナーと話をしてくるよ」

男が下を向いたまま言うと、数人の物乞いが少年を取り囲む。

男は商品の回収を諦め、去って行く。

少年が片腕で必死に握っていたのは焼いた魚であった。港から近い為こういう物も売っているのだろう。しかし、その魚は握り潰され、道に散らばっている。

あの黒髪の男は何者なのだろう。服装は一般的な庶民の物だったが、複数の物乞いを従えている。状況が分からない。

アクアの顔を確かめようとした時、急に腕を掴まれ、後ろを振り向く。物乞いだった。自分の状況ぐらいは理解出来る。

「私はこの人とは無関係です」

話は聞いてもらえなかった。腕を掴まれた時点である程度覚悟はしたが、やはり男達に連れて行かれるというのは怖いものだった。

連れて行かれた先はすぐ近くの裏道だった。行き止まりで逃げ道は無い。捕まえた人間はここに連れて来る事に決まっていたのだろう。アクアを確認すると、怯えている様子はない。少し安心する。

しかし、くつろぐわけにもいかない。他の物乞いも皆立っている。

黒髪の男は思ったより早くやって来たが、その少しの間に少年は覚悟を決めていた様だ。

「もう警備隊にでも突き出せよ。どうせ俺は死ぬんだ」

男が入ってきた瞬間に片腕の少年が声を上げた。しかし、その声は悲しい程弱弱しい。自分でもその事に気付いたのだろう。悔しそうな顔をする。

「君はまだ死なないよ。さっきも走れたんだ。安心していいよ」

男は優しく言う。軽いが、どこことなく説得力もあった。しかし、少年は自分が死なないと言われた事に腹を立てたようだった。反論しようとする。

だが、男はそれを許さない。急に本題に入る。

「僕はこの辺の物乞いを取り仕切っている。皆はリーダーと呼んでいるよ。勿論、僕も物乞いだ。特別上下関係というものも無い。僕の仲間になるといい。それで死なないで済む」

少年には思わぬ提案だったようだ。戸惑いを見せる。

「仲間にならなければ、警備隊に突き出すという事か」

「そんな事したら、君は殺されるよ。提案だ。僕の仲間になれば、死なない程度の食料は手に入る。勿論、君は罪を犯した。すぐには食べ物もあげないけどね」

少し柔らかい表情になっていた少年だったが、やはり最後の一言には過剰に反応する。無理も無い。命が掛かっている。

「少なくともこの地区で泥棒はさせないよ。君が決めるんだね」

ある意味では男の勝利宣言でもあった。何度でも捕まえるという脅しでもある。少年は黙り込

み、悩み始めた。

「そして、そこのお嬢さん達は僕に用かい」

自分の事をリーダーと言った男はようやく私達に話題を移す。そして、その発言は私達の無罪を証明した。私を連れてきた物乞いを呪むが、仕方ないだろという様な顔をする。

「いえ、たまたま近くについて、勘違いで連れて来られただけです」

リーダーは私達をじっと見て、頬の傷跡を掻く。

「それは悪い事をしたね。代わりと言っては何だけど、何か困っている事はあるかい」

なるほどなと思った。理解も早く、すぐに解決策を出してくる。この辺の物乞いの結束が固いのは、この男がまとめているからだろう。確かに彼のような人が身近にいれば心強い。

一見少し頼りなさそうだが、親しみやすいように計算でやっているのが分かる。私も色々な人間と接する機会は多かった。人を見る目には自信がある。少なくとも、彼は悪い人間ではない。

力もあり、優しい。利用するにはもってこいだ。だが、何故かそんな気も起きない。勝ち目が無いからだろうか。

「困っているのは現在ですね。解放してくればそれでいいです」

リーダーは笑う。愛想笑いではなく、楽しそうだ。

「なかなか面白いお嬢さんだね。そうだな。そこまで痩せているわけでもないし、うまくやっているんだろかね」

彼の発言に顔が熱くなる。何か反論をしようとしたが言葉がまとまらず、無言で一步踏み出す。

「ああ、いや、失言だったね。切羽詰まっていけないという話だよ」

急いで訂正を加える彼を見て、後ろにいた物乞いが笑う。そちらにも苛立ったが、彼らに何と思われようともどうでもいい事だと気付くと、一気に冷静になった。

「じゃあ、何かあったら僕の所において。普段は……」

「大丈夫です」

リーダーの言葉を途中で遮り、アクアの手を引く。物乞いやリーダーはそれ以上私達を止めようとはしなかった。アクアは不思議そうに私を見上げていた。

その後、いつもの拠点に戻る。アクアは日記を書く私を嬉しそうに眺め、時々、抑えた口から笑い声が零れた。日記に自分の事を書いてもらえるのが嬉しいのだろう。少し鬱陶しいが、責める様な事はしない。

そして、すぐに眠りについた。まだ、文字が書ける程明るいのが、今日は疲れた。結局、ほとんど祭りは見られていない。しかし、悪い事だけではない。御馳走と同じ様に布切れ以外の温もりを感じながら眠るのも久しぶりの事だった。

誰かに揺り起こされる。小さな柔らかい手だ。その手が大丈夫かと訊いてくる。いつもの海の夢を見ていた。うなざされていたのだろう。しかし、少し冷静になると、恐怖で目が冴える。

「誰ですか」

私が焦ってその少女に問い詰めると、黙って私の鞆を指さす。そして、日記を読めと言ってきた。

まだ、太陽が少ししか顔を出していない時間だが、完全に目が覚めてしまった。あまり食欲は無いが、日記を信じた私はアクアと早めの朝食をとりながら話をする。朝は少し肌寒く、温かいスープでも欲しいところだ。

アクアがオレンジ色の野菜を齧りながら、夢の内容を訊いてくる。見た事無い野菜だ。あまり美味しそうではない。

夢の内容は喜んで話したい事ではないが、彼女を忘れていた負い目もある。

「綺麗な海を見てください。それはとても綺麗で、死にたくなる程綺麗な海なんです」

それで、何故うなされていたのかと訊いてくる。私は正直に私の物では無くなってしまったからだと答えた。

私はその海から帰った晩、いつものように日記にあの景色を書こうとした。しかし、言葉に出来なかった。文字に変換して誰かに伝えられるような領域ではない。あの景色を文字にする事は、まるで完成された芸術品に点数を付ける様な愚かさを感じた。

その時、私は自分の語彙力に悲観するのではなく、独占欲の様な物を感じたのだ。あの景色は実際に見た人だけのものだ。あの世界を知っている自分が特別な存在であるかの様な錯覚すら覚えた。

しかし、数か月が経った時、父の元に商人が訪れた。大して成功もしていない商人が持っていたのはカメラという物だった。風景を完璧に紙に写し出す機械。写した物の中にはあの海もあった。

あの海は有名では無いものの多少の知名度はあったらしい。しかし、私を苦しめたのはその事ではない。こんな貧乏商人がああ景色を完全に再現出来たという点だ。何の才能も要らず、ただカメラさえ持っていればああ景色を人に伝えられる。今までの私の価値観全てを否定された気がした。

私は特別でも何でもないただ綺麗なだけの海で、死にたいとまで思ってしまったのだ。滑稽な話だ。

話を聞いたアクアはその海がどこにあるのか訊いてくる。既に野菜を食べるのは止めていた。やはり美味しくないのだろう。

「えっと、港より先ですから、歩いて一時間くらいでしょうか」

別の果物を渡しながら答えるが、彼女は受け取らなかつた。お腹も空いていないらしい。私も最後の一欠片を口に入れ、自然と食べるのを止める。

気付けば、私が住んでいた所よりも、かなり海に近い所に辿り着いていた。その事に少し気恥ずかしさの様な物を感じる。

しかし、彼女は私の感情には気付かない様で、いつか行ってみたいと口にした。行き方はこの日記帳にも書いてある。読まなくても分かるが、自然とページをめくる。彼女に

場所を説明すると、次は私の日記帳に興味を示した。どうして日記を書いているのかと。

彼女と話していて気が付いたが、会話に違和感がある。質問ばかりなのだ。話を続けたいが、方法が分からないのだろう。彼女の生い立ちを考えると仕方のない事だが、どうも遣る瀬無い気持ちになる。

「自分がどうやって生きているのか確認する為ですよ」

彼女の質問に答える。彼女に同情するわけではないが、何故か素直に話してしまう。自分について話す事はあまり好きではない。

日記を書き始めた当初は頑張っても、数行しか書けなかった。何の変哲も無い普段通りの生活しか送っていなかったからだ。しかし、プライドの高かった私は、幼稚な文を書けば、誰かに笑われる様な気がした。

少しずつ書く量を増やしていくと、生活こそ変わりはしなかったが、見える世界は変わった。窓から見える景色だけでも日々変化している。結露した水滴でも窓は表情を変え、カーテン越しでも月光が枕を照らす夜もある。

父の没落は徐々にであった。しかし、それでも私は日記に記す事で幸せも見つけていた。自分の足で道を歩けば、今までと違う物に気付ける。草でさえ綺麗だった。朝露と共に日光に照らされれば緑に輝き、小さくとも繊細で綺麗な花を咲かせる。

ただ、家族は違った。生活の質に合わせ、顔色は暗くなっていた。その中で、幸せな私は異質であった。あの中で幸せである事は周りを更に追い詰める悪でしかなかった。家族は否定する

だろうが、そうとしか感じられなかった。それで、家を出たのだ。

両親の記憶すら無いアクアには納得が出来ない話だろう。自分で家族を捨てたのだ。ただ、自分で生きる道を決めた。悔いは無い。

ふと気付くとアクアは道の苔を見ていた。灰色の小さな隙間に生えた深緑からは、地味な花が弱弱しく咲いていた。それを綺麗と呟いた彼女の素直さに少し心が痛んだ。

私は片付けをしながら考える。彼女の事を忘れても、この苔の花は忘れないのではないだろうか。どうにかして彼女を忘れないようにしてあげたい。

片付けと言っても二人でする程のものではない。座って見ていたアクアは少しの間を置き、再び口を開いた。彼女の新たな疑問は意外な所であった。自分の悩みや不安は書いていないのかと。

「書いていましたよ。昔は」

書いていたのだ。ただ、飾らない気持ちを書けば、それはそれで滑稽であった。深刻に悩んでいる事すら、文字にすれば子供の様な事だ。それこそ誰かが読んだとしても、同情するどころか馬鹿にするだろう。それで止めた。楽しい事を書けばいい。

アクアは納得をしていない様だったが、それ以上聞いてくる事もなかった。

それから数日がたった。私は一日たりともアクアの事を憶えていた朝はなかった。しかし、日記帳のおかげで生活を共にする事は出来た。

なんとなく生活に慣れた気がし始めた時だった。

アクアが倒れた。私でも片手で抱えられる程軽い体は熱を帯び、白く綺麗だった肌は赤い色に変わった。このままでは恐らく数日で死ぬ。医学的な知識の無い私でもそれは分かった。動物的な直感だ。

彼女には死んでほしくない。朝には忘れていた少女の事だが、何故だかどうしても助けたいと思った。

しかし、彼女を助ける術は分からない。物乞いの私では医者に頼る事も出来ないのだ。無力である。誰かに助けを求めるしかない。

ふと、家族の顔が過る。いくら没落したとはいえ、平民以上の生活は出来ているだろう。本当は帰りたくない。しかし、アクアの命と私のプライド。天秤に掛けずとも重い方は明らかだ。

私が家族を頼るとして、一日で会える距離にはいない。その間アクアを引きずり回すわけにも、放置するわけにもいかない。面倒を見てくれる人を見つけないといけないのだ。

助けを求められる様な人間はいただろうか。家族の顔が消え、リーダーの顔が浮かんできた。彼ならば力になってくれるだろうか。

彼に頼みに行く事にした。私は他の物乞いに彼の居場所を訊きに行った。一応リーダーの話は最後まで聞くべきであったと後悔したが、これからその彼にお願いをしなければならぬと思うと、胃が痛いのは別の件であった。今となっては、あの時捕まっていた良かったと思う。彼には貸しがある。

幸い彼がいる所はここから近いらしい。アクアに一時間も掛からずに帰って来られると説明し

たが、一緒に行きたいと言った。彼女の様子から察するに、少し頼めば納得してくれそうだったが、たった一時間であれば、連れて行くのも置いて行くのも同じ事だと判断した。アクアの意思を尊重する。

リーダーは拍子抜けする程すぐに見つかった。拠点にしている所は私達の路地裏と大差無い。しかし、何故か日当たりや風通しが良く、カビ臭さを感じない。勿論、無臭と言うわけではないが、自分で最も納得のいく表現をするなら人の家の匂いである。

更には近くに複数の人の気配を感じた。

「久しぶりだね。どんな用件だい」

爽やかな笑顔をしているが、すごい人なんだろうと思う。顔の表面は優しそうだが、隠された眼光が私とアクアを突き刺している様な気がした。確信は無いが、ある程度の状況を把握したからだ。

不思議な人だ。アクアと同じ様に、口では表現出来ない魅力を持っている。

「この前は失礼しました。お願いがあつて来ました」

頭を下げる。アクアは足元で心配そうに私を見つめていた。彼女に微笑んでから頭を上げる。

リーダーは少し考える。方法を悩んでいるというより、葛藤している様にも感じられた。

「なるほどね。こっちにおいて。勿論、話は聞いてあげるよ」

リーダーは私だけを見て言う。数分で終わるだろう。アクアに座って待つように言い、彼につ

いて行く。

角を一つ曲がった先で、彼は私の話を馬鹿にする事なく聞いてくれた。色々と質問はしてきたが、全体的を射たものであり、むしろ話の流れを滑らかにした。

「とりあえずは、ご飯でも食べようか」

何の脈絡も無くそう言うと、私の返事を待たずにアクアを呼びに行った。提案ではなく決定事項を述べられたようだ。

彼がアクアを連れて来るのには少し時間が掛かった。恐らく、私に聞こえないように二人で何か話していたのだろう。

リーダーは座ると、大声で裏に指示を出す。私と話す時より低い声だった。さっきまでは静かだったが、何人かが動き出した事が分かった。

「すぐに来るよ」

彼が言った通り、すぐに食材が運ばれ、さらに料理と言える物まで出て来た。料理を運んで来た物乞いの中に片腕の少年も見つけた。健康体でもないが、もう死の影は見えない。

「これどうしたんですか」

一気に食欲という物を思い出す。私の家を出ていた物に比べれば質素ではあるが、腹を満たすだけの作業ではない食事は随分と久しぶりだ。だが、これだけ親切にされては裏があると疑ってしまう。

「祭りの間に稼いだんだよ。用心棒とか店番にここの奴らを働かせていたからね。普通は雇って

くれないんだけど、僕は結構顔が広くてね。僕の紹介だったら物乞いでも問題が無いんだ」
確かに運ばれて来たのは日持ちする物が多い。焼き魚などは新たに貰って来たのだろう。祭り
の時のだとすると、少し心配だ。

上手く回っている。店側はお金ではなく食糧を払えばいいし、物乞い側は仕事を貰える。やはり、集団の方が生きやすいという話は本当なのだろう。

だが、これはリーダーの信用が無いとあり得ない話だ。彼の服が物乞いの中では小綺麗なのも信用を得る為だったのだろう。

「さて、本題に入ろうか」

彼はアクアにスプーンを渡しながら訊く。

「君の過去を教えてもらえるかな」

アクアは少し悩む。話さなくていい方法を考えている様でもあった。そして、彼女は訊き返した。何が訊きたいのかと。

「覚えている所からだね。僕が知りたい事は全部だよ」

彼女は何も覚えていない。私の日記にはそう書いてあった。それを伝えようとしたが、彼女は私の服を掴んで止める。複雑な顔をしていたが、楽しそうでない事は分かった。

学者と共に生活をしていた。私に嘘をついていた事に申し訳なさそうにしながら、そう言った。本当の事を隠していたという事実には驚く私を尻目に、子供による拙い自分語りが始まった。

彼女の最も古い記憶、それは学者の家に住ませてもらい、その代わりに自分の観察をさせてい

たというものであった。つまり、本当に両親の事は憶えていなかった。アクアという名もその学者が付けてくれたらしい。

その学者は勿論、観察対象のアクアの事をメモに残していた。それで生活を共にする事が出来た。

「それで、君が憶えてもらえない原因は分かったのかい」

リーダーは私の時と違い一つずつ質問をする。

アクアの答えはある程度分かりきったものであり、彼の質問も確認の意図が大きかっただろう。原因不明。

話の節々からその学者が優秀で王族の信用も得ていた事が分かった。つまり、私が思い付かない様な、きちんとした科学的な調査を行っている。

私がアクアを憶えられるように色々な努力をしていた事は全て無駄だったのだ。しかし、彼女はその事実を知っていながら、私に無意味だとは教えなかった。

私はアクアの体質ではなく、ようやくアクア本人が見えてきた気がする。私のその無駄な努力が嬉しかったとも言えるだろうか。

「次の質問だね。君はどうやって追い出されたのかな」

その質問に驚き、リーダーの顔を見つめる。彼は魚の骨と格闘していて、私の疑問を投げかける目には気付かない。何故追い出されたと決めつけたのだろうか。

アクアも私と同様に少し驚いていたが、すぐに語りを再開した。

その学者はアクアの研究が進まない事で少しずつおかしくなっていた。無理も無いだろう。次の日には自分がどんな研究をしていたのかすら覚えていないのだ。

そして、追い出された。そう言いながら、彼女は涙を流す。

アクアについてまとめてあったメモの束を目の前で暖炉に投げ込まれたらしい。そのメモは彼女が人と繋がる唯一の手段であり、絆でもあった。

燃えやすいように破ってから。そう呟いた時の彼女は今までで最も感情を見せた気がした。

その話を聞いたリーダーは少し唇を嚙む。

「じゃあ、状況は把握したよ。僕もこの事を憶えておかないといけない。悪いけど、日記帳を数枚くれないかい」

リーダーの頼みは至極当然な事ではあるが、宝物の日記を傷つける事には抵抗がある。アクアも口に出しはしないが、何も思っていないわけではなさそうだ。しかし、ここで時間を掛けて悩む事は確実に間違いだである。

鞆から日記帳とナイフを取り出す。日記帳を開く。昨日に左のページの埋めた所で終わっていた。右の紙にナイフの先を軽く押し当て、引く。日記帳から綺麗に三枚の白紙が離れる。

「三枚あれば十分ですか」

「ああ。ありがとう」

リーダーはそう言いつつ、私が白紙を渡そうとしても受け取らない。既に彼は魚を食べべ終わり、手は空いている。

「その日記帳も置いて行って。そしたら、考えてあげる。明日の朝、アクアを連れてもう一度来てくれるかな」

彼の結論がそれだった。

私のお願いは私が家族に助けを求める間、アクアを守って欲しいというものだ。この話にリーダーのメリットはほぼ無い。せいぜい借りを返せる事と、グループのメンバーが二人増えるだけだ。

日記帳は何の関係も無い。しかし、ここまで来ればそれに従うしかないだろう。

「絶対に読まないでくださいね」

それだけは念を押しておく。文字を書けると言うのなら、必然的に字も読める。彼は頬の傷痕を掻きながら、それくらいは信頼してほしいなと口にした。どうやら傷を掻くのが癖らしい。

その後は他愛もない話を食事の間続けた。やはり、リーダーの話は面白く人を惹きつける物だったが、一向にスプーンを使わないアクアが気になり純粹に楽しむ事は出来なかった。

そして、リーダーの本心が見えないまま、私は命でもある日記帳を置き、その場を後にする。私よりもアクアの方が日記帳を名残惜しそうにしていた。

自分たちの拠点に戻る。まだ眠るような時間でもないが、すぐにアクアを寝せる準備をする。今の私に出来るのは彼女を休ませる事ぐらいだ。

彼女を温めながら、今日という日を思い返す。どこからかやって来た水が石畳に染みを作って

いた。

目が覚める。知らぬ間に寝ていた様だ。目を擦ると、泣いていた。とても悲しい夢を見ていた。どこかの少女の人生を覗いていた気はするが、それ以上思い出す事は出来ない。

道路の水滴はほとんど広がっていなかった。かなり長い夢のように感じたが、ほんの数分だった様だ。辺りもまだ明るい。

そこで、自分と一緒に布切れに包まる少女に気付く。この少女は何なのだろう。勝手に入り込むなんて気持ち悪い。

そう思った瞬間、頬に痛みが走る。自分自身で頬を叩いていたのだ。呆然と右手を見つめる。何か忘れてはいけない事があった気がする。それはとても重要で、今の私に必要な事。

そうだ。この少女はアクアだ。今日もずっと一緒にいた。たった数分の睡眠で、こんな大切な事を忘れてしまいそうになるなんて。

危なかった。私には今、日記帳が無いのだ。リーダーは何故私から日記帳を取り上げたのだろうか。

日記帳が無ければ、やはり明日にはアクアの事を忘れているだろう。そして、彼女の存在に気付き、一度は拒絶してしまうだろう。

そこまではいつも通りで、日記帳が無ければ……。
彼女の寝顔を見つめる。急に背筋が冷え、頭の血が下がる。気持ち悪い。

自分が気持ち悪い。

アクアと一緒にいる理由がやっと分かった。いや、本当は気付いていたのだ。いつもの様に都合の悪い事から目を背けていただけ。

それは、忘れられるからだ。

何か辛い事があっても、寝れば無かった事になる。どうせ死んだところで一晩経てば、何とも思わない。日記に書かれた無意味な文字列だ。

私は一人で生きたいわけでも、他人に興味が無いわけでもない。人と関わり、傷つくのが嫌なのだ。

私の人生を振り返っても、不幸な家族を見下し、見るに堪えなくなり、家を飛び出した。そして、一人でいる事も出来ず、忘れられる都合のいい少女を見つけ依存していた。

日記には色鮮やかな事ばかりが書いてあったのにおかしな話だ。

私には何も見えていなかった。自分の事ですら。だから、リーダーは私から日記を取り除き、普通の人の視線に立たせたのだ。

普通はそうだ。明日にでも忘れている人間に優しく出来る人はそういない。そして、その事実は自分の汚さを浮き彫りにする。

アクアは特に余裕の無い人間と一緒に生活をさせてはいけない。丸い刃で気付かないうちに傷つけてしまうのだ。

救いが無い。彼女も穢れていれば誰も傷つかなかった。だが、彼女の心は暴力的に美しい。

アクアと生活を共にしていたという学者は生活に余裕があったとはいえ、よくも長い間それに耐えたものだと思う。

被害者は加害者が忘れた後も何をされたか憶えているという。しかし、与えた物が優しさだったとしても、自分が忘れた後にまで憶えていられるというのも気持ちが悪い。

自分が汚れていると気付いていない者ほど汚いものだ。

流石リーダーだ。人がついて行くのも納得出来る。こうなると借りがあるのは私の方だ。とんでもない物を押し付けようとしていた。

謝りに行く。アクアを起こさない様に、それでいて急いで布切れから飛び出す。彼女の体が冷える前に帰って来なければいけない。

リーダーの所に走る。

まだ、日も落ちていないが、リーダーは座ったまま目を閉じていた。眼帯は外している。しかし、私の肩で息をする音ですぐに目を開けた。寝てはいなかったようだ。

「リーダー。会いに来ました」

「良かったよ。自分で結論は出たかい」

彼は眼帯を付けながら言った。納得はしていない。しかし、頭では理解してしまっているのだ。彼を頼るわけにはいかない。彼女はここの人間と関わってはいけないのだ。

服を握りしめる。次の手は思い付いていない。しかし、アクアの危険性を知った今でも、本当

の自分に気付いた私は自信を持って彼女を救いたと言える。

彼女が動けるのは本当にあと二、三日だろう。それを過ぎるとまだ見えない選択肢が削られてしまうかもしれない。

「ご迷惑をおかけしました」

頭を下げる私に彼は優しい声で現実を突きつける。

「いいよ。人は一人で生きていく事なんて出来ないのだから。でも、君がいないと生きていけない人間は一人もいないんだよ」

「今のアクアには私がいないと……」

この反論は無理があった。しかし、言わずにもいらなかった。

「いても死ぬさ。あれは仕方ない。君のこれ以上の干渉は彼女の死に方の選択肢を減らすだけだよ。人は鎖でもあるんだ。人生を終える方法を選べるというのはある意味では恵まれているんだよ」

悟った様な言い方に怒りで頭が熱くなる。しかし、口からは何も言葉が出ない。彼の言葉が上辺から来るもので無い事も分かっているからだ。

「彼女は死を受け入れている。最期に人生を彩ってくれた君に迷惑を掛けたくないんだ。それって実はとても難しい事なんだよ」

彼の口調は更に優しくなった。そして、ゆっくりと立ち上がる。

「僕は敵味方関係なく色んな死を経験した。全てが後悔となって今も背中に押し掛かっている。」

助けたいよ。でも、彼女を救う方法は無いし、彼女もそれは理解している。あの子はとても頭がいいよ」

「反論をしようとしたが、それだけ言うとりーダーは私の目を見ながら日記帳を渡してくる。帰れという事だろう。」

「君が望む形にはならないだろうさ。だけど、一番綺麗な形には収まると思うよ。大人には助けたい人がいても、理由が必要なんだ」

私には理解出来ない事を悲しげな目で呟いた。

戻るとアクアは起きていた。眠そうだ。彼女は目を擦りながら、りーダーの所に行っていたのかと訊いてくる。

「ええ、日記帳を返してもらって来ました。でも、貴方の事は了承してもらえませんでした」

彼女の隣に座りながら答える。文句を言われるかとも思ったが、彼女は思わぬ事を口にした。

りーダーが私に優しい理由に気付いているのかと。

「変な事言わないでください。全然優しくないじゃないですか」

彼は私の事を何とも思っていないし、私も彼の事は何とも思っていない。

そして、急に話題を変え、日記帳の事を聞いてくる。

「書く量ですか。最近は一日一ページだと決めていますね」

次に最初に会ったのは何日前かと聞いてくる。

「日記帳には五日前となっておりますね」

今日も書くのかと聞いてくる。

「ええ、そうですね」

それで質問は終わった様だ。何の脈絡も無いが、矢継ぎ早の問いかけ。前もってどんな質問をするか決めていた様にも感じられた。

彼女はそれだけ聞くと安心した様に眠りにつく。

私はそれを確認し、日記を書き始める。昨日までの飾った言葉ではなく、自分の言葉を。死んだ文字ではなく、血の通った文字を書く。

アクアの事、私の事、これからの事。ただ不安だけが吐き出される。私はこんなにも心細かったのだ。

もう、目を背けるだけの毎日は止めよう。粗探しの様に綺麗な所だけを見つめ、無味の文を書き連ねていた。それでは私の宝物がただの言葉の棺桶だ。

一ページを書き終わり、ページをめくる。辺りはもう大分暗くなり始めている。最近日は短くなった。もっとアクアの事も書いておきたい。綺麗で強くも脆い少女。書きたい事はいくらでもある。だが、二日分を書き終わり、右のページに進もうとして、止めた。

これではまるで、今日でアクアとお別れの様だ。私が彼女を守るのだ。命に代えてもいい。リーダーは方法が無いと言った。しかし、彼に出来なくて私に出来る事も何かあるはずである。

利益や見返りは関係ない。私が生きてほしいと願っているのだ。

寝ているアクアと手を繋ぐ。とても熱い。こんなにも頑張って生きているのだ。他人が勝手に諦めていいわけはない。

そのままの体勢で眠りにつく。この手を離さない様に。

見慣れた海。しかし今日は先客がいた。その先客は波が足に触れるかどうか程の位置に腰を沈め、月を見上げている。全体的に寒色の風景内で褐色の少女。しかし、異質ながらもまるで風景の一部の様に溶け込んでいる。その姿に嫉妬の様な感情を覚えた。

「誰ですか」

「この海は貴方の物じゃない。それに貴方はこの海が嫌いでしょう」

こっちを振り返る事もなく、少女はそのままの格好で呟く。自分の発言に絶対的な自信を持っている様子に腹が立つ。

「私は死にに来たんですよ」

それが当たり前であるかの様に言う。まるでちょっと散歩にでも来た様な言い方だ。しかし、それが事実である事は分かった。

「死んで全てと一つになるんです。好きな様に死ぬる。それって素晴らしいとは思いませんか。まあ、生きられるなら生きたいですけど、急がないとこれすらも出来なくなりますからね」

そう言って少女は自分に打ち寄せる波を名残惜しそうに見つめる。その顔はどこか見覚えがある気がした。

「では、さようなら。今までありがとうございます」

少女は重い腰を上げ、海に進んで行く。私の返事など何も聞かないまま。

「ちょっと待ってください。波に弾かれて汚く死ぬだけですよ」

私も海に飛び込むが、暖かい海水が体に纏わりついてうまく進めない。それに對し、少女はまるで陸を進む様に歩いて行く。胸の高さまである海水は少女の動きを全く邪魔しない。

揺れる水面が私の顔を歪な形でくっきりと写しだす。

私はその少女に死んで欲しくないのだ。しかし、私がかいても少女との距離は広がるだけだ。「この日の為に練習していました。ありがとうございます」

そう言って少女は水の底に沈み、泡となった。

目が覚める。星が揺れていた。満月の落とす光が強く握りしめた掌の水滴を煌めかせる。こんな姿を人には見せられない。初めて一人で物乞いをしていて良かったと思う。

日記帳。そこにとてつもなく重要な事が書いてあったはずである。眠い手で目を擦り、ページをめくる。しかし、日記は収穫祭の前日で終わっていた。明日は収穫祭の日であっただろうか。収穫祭で御馳走を食べたはずだが、日記には書いていない。ここ数日の大部分の記憶と日記のページが無い気がする。リーダーに何枚か渡したが、それにしても切られたページは多い。

不思議な事もある。そう思っていると、最後の行に目が止まる。

『私はそのアクアという少女としばらく共に生活する事にした』

知らない名前がそこにはあった。綺麗な名だ。

「アクア」

口に出して読んでみる。再び日記の文字が歪みだし、慌てて星を見上げる。忘れてしまう様な少女の事だ。大した間柄ではなかっただろう。しかし、胸のざわめきが止まらない。

心細い。布切れを抱き寄せる。外気が足に触れ、全身を冷やす。

私に再び人と関わりたいと思わせてくれるこの少女は誰だ。死なない以外の望みを持たせてくれる少女とは……。

急に謎の睡魔が襲ってくる。もう少しで重要な事が思い出せそうだが、別の大きな力がそれを邪魔している様にも感じられた。

「こちらこそありがとう」

朦朧とする意識の中、私は眠りにつく。それはそれは綺麗な海の夢だった。

次の日、リーダーに会いに行く。彼は徹夜していた様だった。

「来たか。インクを貸してくれ、もう無かったんだ」

唐突に頼んでくる。貴重な物だが、彼の頼みだ。

「いいですよ」

彼は私に背を向け、紙に文字を書いて行く。その紙にはもともと結構な量の文字が書いてあり、メモの様に書き加えていく。三、四枚はあった。文面は背中で私に読ませない様に隠している。

「それなんですか」

「ラブレターかな。七歳ぐらいの女の子から」

わざと得意気に言う彼に少し腹が立つ。覗き込もうとしたが、彼は背を向けたまま体を動かし文面を隠す。何故分かるのだろうか。

「で、返事はどうするんです」

「まさか僕に持って来るとは思ってなかったからね。どうしよう。今は海の底にいますけど、君を連れて挨拶に行こうかな」

一つも意味が分からなかった。リーダーの背中を見つめる。

「人は一人で生きられるわけじゃないんだ。だから、君もどこかでお世話になっていたのかもしれないね」

彼がわざわざ振り返ってから言った。急に目が合い、少し戸惑う。

人は一人で生きられない。だから、一人で死ぬ事も出来ない。ふと、そんな言葉が浮かんだ。

「ところで、私は最近どうやって生活していたか記憶があやふやなんですけど、知りませんか」
会話にならず、無理矢理話題を変えろ。しかし、彼はまだ理解出来ない事しか言わない。

「全部知っているよ。普通の人間は生き方しか選べない。彼女は死に方しか選べない人間だったんだらうね」

「全く意味が分かりませんね。その人は死んだという事でいいんですか」

私に分かる様に説明する気がさらさらない彼の後ろ姿を覗む。

「まあ、これは僕が伝えないといけない事を伝えただけの自己満足だからね。聞き流していいよ。それで、どうしてここに来たんだい」

彼は紙を片付け、インクを私に返ししながら、急に本題に入った。おそらく気付いているが、私自身で口にしなければ意味が無い。磨き上げたプライドはもう必要無いのだ。

「私をグループに入れてください。一人はもう辛いんです」

流石に目を見ながら言う勇氣は無い。彼の声を待つ。

「やっと言えたね。では、代わりに綺麗な海に案内してもらおう」

彼の提案は思わぬ事であったが、拒否されなかった事に安堵する。ちょうど私も行きたいと思っていたところだ。快諾する。

「特別ですよ。本当は夜の方が綺麗なんですけど」

彼はあの海を見て、どんな反応をするのだろうか。二人であの海を見に行くという事に少し胸が躍る。

「いいよ。二人でその海に見せつけに行こう。こうなれたのは彼女のおかげだからね」

彼は頬の傷痕を掻きながら、また少し意味の分からない事を言う。

港に続く道に出た瞬間、さっぱりとした風が顔を撫でる。空気が悪い物を拭い去って行った気がした。空を見上げると透き通った空が広がっている。澄み渡る空とはこういう物を言うのだろう。

「綺麗だな」

そう言った彼の顔を見つめると、恥ずかしいという感情が湧いてくる。彼がこちらを向くのが分かり、思わず顔を背ける。

「はい。でも、今から行く海の方が綺麗です」

そう言って、もう一度空を見上げる。このまま時間が止まればいい。そう思った。

今日の日記に書きたい事は山ほどある。だからこそ一文で終わらせよう。これが今の私の全てだ。

生きたい。

(工学部機械システム工学科三年)

君の部屋

伊藤 祥太

○コンタクトレンズ

TSUTAYAで十三時に待ち合わせをしたのに、斎藤は十三時半になっても来なかった。私は、暇を持て余し、文芸誌の表紙を眺めたりファッション誌をパラパラとめくったりしていた。しかし、文芸誌には知っている作家の名前は一つとして載っていなかったし、ファッションにもほとんど興味がないので、それにすぐに飽きてしまった。十三時四十分になったところで彼の携帯電話にメッセージを送ってみたけれど、十分待っても応答はまったくこない。

寝坊したごめん、適当にDVDを見繕って借りてきてと、斎藤から連絡が来たのが十四時半。私はTSUTAYAの隣にあるマックにいた。昨日発売された名前の覚えられないハンバーガーと、Sサイズの炭酸ジュースを昼ごはんとして胃に収めていると、スマホがぶると震えてメッセージの到着を知らせた。「お昼ごはんどうする？」と送ったら、「昨日飲みすぎて胃もたれしてるから、僕はいいや」と返って来た。

こういうときは怒っても仕方がないのだと自分に言い聞かせて、以前から気になっていた少女漫画が原作のラブコメと、斎藤が好きそうな洋物のアクション映画を借りた。駐輪場まで歩きながら、このレンタル代は私持ちになるのだからかと考えていたけれど、旧作七泊八日二百十六円で、何を私はケケケチしているのだろうと自分の懐が浅いのに失望した。しかし、これまでに斎藤が進んでお金を払ってくれたことが果たしてあっただろうか？

原動機付き自転車に乗って斎藤の家まで二十分。到着する頃には十五時半になっていた。こんなことなら、はじめから適当にDVDを選んで借りて、斎藤の家に来ればよかったのだ。あるいは、十三時半になっても姿を見せなかった時点で、私はここまで来て合い鍵で部屋に乗り込むべきだったのだ。そしてすやすや眠る斎藤の寝顔を見つめながら、布団の上に煎餅のかげらでもこぼしてやればよかった。

そんなことを考えていても仕方がないので、アパートの二階、角部屋にある斎藤のドアを三回ノックする。出ない。私はもう一度三回ノックする。出ない。今度は強めに五回ノックしたけれど出ないし、隣の部屋に音が響いてはいけないので、靴の中から合い鍵を取り出し、ガチャガチャと音を立ててドアを開けた。どうして、このアパートにはインターホンがついていないのか。家賃が安いせいだ。

部屋に入ると、二週間ほど出し損ねていると思われるゴミ袋（大）がパンパンの状態で三つ仲よく並んでいた。もう九月だというのにコバエが数匹飛んでいて、ここはアパートの一室にこしらえた人間の巣だなと思った。この部屋が人間の巣をやめたならば、友人カップルとパーティー

でも開きたいと思っっているのだけど、それはたぶん、斎藤がこの部屋を引き払う日まで実現しない。

斎藤はシャワーを浴びているようだった。玄関をあがってすぐ右手にある風呂場は締め切られていて、引き戸に水滴がびちゃびちゃと当たっている。隙間からシャンプーの香りが漏れ出ている。朝シャンはハゲるから夜のうちに入れと再三再四脅しているのに、それはいつも聞き流されてしまう。斎藤は、夜になると立ち上がるのが億劫になってしまうタイプの人間らしい。だから、夜お風呂に入ることができないのだ。そんなタイプの人間は、斎藤以外に見たことがないけれど。

一時間半待たされた挙げ句待ち合わせ場所に現れず、しかも呑気に朝シャンならぬ昼シャンをしている斎藤にちょっと腹が立っていた私は、斎藤が買い置きしているパックの豆乳にストローを突き刺し、二本立て続けに飲んだ。布団がまだ敷きっぱなしになっていたので、私はその上に腰を下ろし、枕を抱えてそこに顔をうずめた。斎藤の匂いがした。私は斎藤に腹を立てていたものの、斎藤のことは好きだし、約束破りなど毎度のことだ。そう言い訳することで、怒りの対象たる斎藤の体臭を嗅ぐ行為を肯定した。

斎藤の匂いを嗅ぎ飽きたところで、私はテレビをつけることにした。ところで、斎藤は私が入ってきていることに気付いているのだろうか。鼻歌なんて歌っていたから、物音に気付いていない可能性は大いにある。

斎藤の部屋の床は汚い。毎日掃除をする私の部屋はごみ一つ落ちていないけれど、斎藤が掃除をしているところを見たことがないので、この部屋の床が汚いのは必然である。私は一週間に一

度くらいはこの部屋を訪れるけれど、自分の部屋以外をわざわざ掃除しようとも思わないので、服にごみが付かないように布団の上に避難しているわけだ。もっとも、この布団だって最後につ干したのかわからないし、ごみだらけなんだろうけど。

しかし、今日の床の汚さは目に余る。なぜ玉ねぎの皮が床に落ちているのか。なぜ米粒が床に点在しているのか。なぜコバエの死骸が我が物顔で居座っているのか。なぜ私は人間の巢の主などを好きになってしまったのか。すべては謎に包まれている。しかし、包まれた謎も解決されねばならないし、それを解決できるのは斎藤ではなく、恐らくこの私なのだろう。

面倒くさいけれど、私はクイックルワイパーで床を掃除することにした。斎藤はまったく掃除をしないくせに、彼の掃除機は買って半年もしないうちに壊れてしまった。もう一年も壊れたままである。早く捨てると言っているのだけれど、粗大ごみの日がよくわからないと言ってごみの投棄を回避している。たぶん、調べてもいない。

布団をあげて、クイックルワイパーを床の上で滑らせる。ごみは驚くくらいよく取れた。たかが六畳一間のごみを集めるために、十分で五枚のシートを取り替える必要があった。五枚のシートを取り替える間にも斎藤は風呂場からあがってこないし、シャワーの音もずっと聞こえているので、水道代とガス代の浪費を叱らなければならないと心に決めた。ついでに、人間の巢をいくらか住みやすいようにしてほしい旨も伝えなければならない。

最後の仕上げにと六枚目に取り替えて掃除をしていると、部屋の隅に何か変なものが落ちていたのを見つけた。

それは一見すると、透明なプラスチックのかけらのようなものだった。ホコリと髪の毛と玉ねぎの皮と米粒とコバエの死骸は散々見てきているも、透明なプラスチックのかけらをこの部屋で見かけたことは今まで一度もなかった。

ごみをごみと知って手に取る趣味はなかったけれど、私は好奇心から、そのプラスチックのかけらを拾ってみた。直径一センチくらいのそれは、薄い円盤状のものがいびつに折りたたまれたような形をしていた。何だこれは。ごみだ。

しかし、私はそのごみをどこかで見たことがあった。大事なもの、というわけではない。これと似たようなものを、私はどこかで見たことがある。十秒ほど考えて、私はその正体を思い出した。

コンタクトレンズだった。ソフトコンタクトレンズが水分を失い、かぴかぴになっているのだった。昔、母親のI D A Yコンタクトレンズを一日机の上に置いて干し、翌日それを粉々に砕くという遊びを連日繰り返していた。まさにそれだった。

私は少し考えた挙げ句、それを指で粉々にし、ゴミ箱に捨てた。

六枚目のシートを捨てて布団でゴロゴロしていると、斎藤が風呂場からあがってきた。トランクス一丁で私に抱きついてくる。ちゃんと身体を拭いていないし、髪の毛なんてたぶん拭いてすらいないので、私の身体まですぐにびちゃびちゃになってしまう。私は斎藤の首からバスタオルを奪い取り、犬にするようにして斎藤の背中と髪の毛を拭いた。

「ごめん、寝坊しちゃって。昨日、三時くらいまで飲んでさ」

「絶対に許さないから」

「だって、高橋が全然帰らないからさあ」

「はいはい。言い訳ね」

「ごめんってば。今度、昼飯奢るからさ」

齋藤は、昼ごはんを奢れば大抵のことは許されると思っている。けれど、その約束が果たされた試しはない。彼に悪気はない。ただ忘れていただけなのだ。

齋藤がまた抱きついてきたので、「とりあえず服着てよ」と言いながら身体を引き離す。

「ねえ、齋藤ってコンタクトにしないの？」

干しっぱなしの洗濯物からハーフパンツとTシャツを探す齋藤の背中に訊いてみた。

「コンタクト？ 昔してたけど、やめちゃったなあ。毎日付けるの面倒くさいんだよね。あと、

毎日外すのも面倒くさい」

服を身に着けた齋藤は、そう言いながら机の上に置いてある黒縁の眼鏡をかけた。齋藤らしい答えだ。ちなみに齋藤の視力は、〇・一を大きく下回っているらしい。

「なんでそんなこと訊くの？ 千沙、コンタクトにするの？」

齋藤がテーブルに置いたTSUTAYAの小さなバッグを開いて、DVDのタイトルを確認している。

「しないよ。だって、私の視力一・二だよ」

「え、お前そんなに視力よかったの？ まじかよ」

斎藤が眼鏡越しに私の瞳を見つめる。私は斎藤が手に取っているDVDのうち、私が見たかった方を手に取った。

「まじまじ。ねえ、昨日来たのは高橋君だけ？」

「うん、高橋だけ」

「高橋君、視力よかったっけ？」

「はあ？ 何、高橋にコンタクトのこと聞きたいの？」

「いや、ちょっと気になっただけ」

「ふーん。あいつ、視力はマサイ族並みだって自慢してたな」

「え、マサイ族って視力いいの？」

「さあ。悪かったら自慢しないんじゃない」

「そっか……。最近、高橋君以外はこの部屋に来た？」

「うん？ どうだったけなあ……。たぶん、ここ二ヶ月くらいお前以外入ってないと思うけど。高橋が昨日来た以外は」

「ふーん、そっか」

「何？ なんがあるの？」

「いや、何でも。彼氏の交友関係くらい知ってこうかなあとと思って」

「ふーん、そうか。あ、DVD借りてきてくれてありがとう」

「ああ、遅れてきたこと全然許さないけどね。腹いせに豆乳を二本飲ませていただきました！」

まじかよ、と言って斎藤は苦笑いをした。そして、「ごめん」と言った。斎藤は、ごめんと言って豆乳を二本飲ませて昼ごはんを奢ればすべてのことが許されると思っっている。

「もしかして、部屋も掃除してくれた？」

あれだけ汚かった部屋に塵一つなくなっただのにもすぐ気付けないので、斎藤にはよほど注意力が欠損していると見える。

さっき潰したコンタクトレンズの感触を思い出していた。あのコンタクトレンズは、一体誰のものなのだろう。この家に、高橋君以外の人物が入りしていないのだとするのなら、あのコンタクトレンズは一体どこから湧いて出てきたのだろう。

斎藤が抱えていた枕を奪って、鼻をそこにうずめてみた。先ほどと同様、斎藤の匂いがした。斎藤以外の匂いはしなかった。しかし、それは先ほど浴槽から漏れ出ていた匂いとまったく同じで、私もこの人間の巣に泊まる度に、この匂いを身にまとうことになるのだ。

「なんか食べていい？」

テレビをHDMI入力に切り替えて、斎藤が訊いてきた。

「え、さっき胃もたれするって言ってたじゃん」

「いやあ、風呂入ってすっきりしたら、なおっちゃってさ」

と言いながら、斎藤は水が半分くらい入ったままになっている電気ケトルのスイッチを入れた。カップラーメンを食べるつもりらしい。

「まあ、別にいいけど。私は誰かさんのせいで、一人で寂しくマックに行ったけどね」

「だから、ごめんってば。ほら、ラーメン一口やるから」

斎藤は、私が食べ物を食べれば何でも許すと思っっている。私もいつまでも怒るのは面倒くさいので、斎藤が食べ物くれたら許すことにしている。これは暗黙の了解だ。

私は寝転がって、斎藤の腰の辺りに抱きついた。あのコンタクトレンズは、一体誰のものなのだろう。斎藤のものではないし、私のものではないし、高橋君のものでもない。誰のものだ。他人のコンタクトレンズが偶然この部屋のごみに紛れ込む可能性は、一体どれほどあるのだろうか。お湯が沸くのにも時間がかかるし、ラーメンができるにはお湯を注いでさらに三分待つ必要がある、とりあえず私はラブコメのDVDをデッキにセットし、リモコンの再生ボタンを押した。よくある三角関係ものやつだ。

○置き手紙

目が覚めると朝の十時だった。テレビと冷房と電灯はつけっぱなしで、昨日飲んだ発泡酒の缶が枕元に転がっていた。スマホにメッセージが三件届いていたけれど、どれもグループメッセージの、僕には関係のない話題だった。

三限には行かなくてはならない。最寄り駅まで歩いて五分。電車の待ち時間も合わせて、大学の最寄り駅まで二十分弱。歩いて十分で教室。十三時に到着できればいいので、まだ時間に余裕

はあった。

トイレに入ろうと思ってドアを開けると、そこに女の子が眠っていた。

僕は意味がわからなくて、自分の股に力を入れて感覚を確かめたりしてみたんだけど、トイレで寝ているのがよく顔を見知った先輩だということに気付いて安心した。先輩だったら変なことになっていないだろうという安心と、先輩とだったら変なことになっていても、僕の方は覚えていないのだから白を切ればまあ何とかなるだろうという安心だった。

「起きてくださいよ。何してるんすか」

僕はなっちゃん先輩の肩をゆすって、目を覚ましてもらおうとした。昨晩着ていた上着を脱いで、キャミソール姿だったから、僕の両手はなっちゃん先輩の素肌に触れた。冷房が効かないトイレの中で眠っていたからか、ベタベタとした感触が少し気持ち悪かったけれど、女性の汗を触るという経験は僕を少なからず興奮させた。しかし、これで興奮してはならぬという気持ちが徐々に大きくなり、ひとまず先輩を起こすのを諦めてトイレの向かいにある洗面台で手を洗った。

「なっちゃん先輩、講義ないんですか？」

僕は非常な尿意を催していたため、一刻も早くなっちゃん先輩には便座から立ち退いてもらわなければならなかった。しかし、先輩は依然として意識を取り戻さない。

仕方なく僕は先輩の脇の下から背中へと腕を回し、なっちゃん先輩を立たせて移動させることにした。手を差し入れる瞬間、僕は、彼女以外の女性の身体に自分の身体を密着させることが実に一年ぶりであることを思い出して緊張していた。しかし、この行為は決していやらしいとかい

う類のものではなく、僕の小便を放出させるために必要な行為なのだと言われなくても、自分に言い聞かせて、脇の下に手を入れる。僕はできるだけ、今触れているものが女性の身体だということを意識しないように努めた。しかし同時に、なっちゃん先輩の身体に触れることができたという事実にも感謝もしていた。僕はなっちゃん先輩のことが特別好きというわけではなかったけれど、愛嬌のある顔をしているし、Eカップだし、ボブヘアがとても似合っているし、全然悪い気はしなかった。

意識のないなっちゃん先輩を立たせるのは至難の業だった。トイレの床に膝立ちをして力を入れてみたけれど、まったく身体が持ち上がらない。三回チャレンジした後で小休止を挟み、四回目の挑戦をやっと身体が持ち上がった。それからなっちゃん先輩を背負うような形となり、先輩の足を引きずりながら、さっきまで僕が寝ていた布団の上まで運んだ。もちろん僕は背中になっちゃん先輩のおっぱいを感じていたのだけど、背負う以外に運ぶ方法がなかったし、なっちゃん先輩は僕の背中におっぱいが当たっていることなんて気付いていないし、ご褒美だと思って僕はその感触を背中ですっかりと抱いていた。

なっちゃん先輩は本当に全然起きなくて、僕は先輩を布団の上に半ば放り投げる形となってしまった。五メートルほど引きずったため、僕も少し汗ばんでいた。首元が濡れているのは、僕の汗なのかなっちゃん先輩の汗なのかよくわからなかった。

無意識な女性のEカップの谷間。僕はそれをじっと見つめた。どうせばれないだろうし、触ってみてもいいのではないかと思っただけで、ばれたときのリスクが大きすぎるし、今後ずっとなっ

ちゃん先輩に対して罪悪感を抱くのも嫌なので、僕はそれを我慢することにした。僕は賢いのだ。用を足した後、昨日買っておいいた菓子パンとコーヒー牛乳を食べ、朝の情報番組で動物園の鷹が逃げ出したニュースを見た。その番組が終わって、昼前の通販番組がはじまるとやるのがなくなってしまったので、昨日読みはじめたディケンズの『二都物語』を開くことにした。しかし、翻訳の文章に嫌気がさして数ページでやめ、なっちゃん先輩の顔を眺めることにした。

なっちゃん先輩は、ほとんど寝息を立てていなかった。実は死んでいるんじゃないかと心配になって鼻をつまんでみたら、口をあがあがさせて顔を動かしたので、生きていることを確認することができた。

化粧を落としていないらしく、近寄ってみると目元が黒く塗ってあった。僕は女性の化粧を間近で見ると「こんな子ども騙しの塗り絵で顔が変わってしまうのか」と落胆するのだけれど、今回もその例に漏れなかった。僕はなっちゃん先輩のことを可愛いと思っているけれど、そういえばすっぴんを見たことはなかった。であるからして、この「可愛い」が正当な評価であるかどうか、今の僕には判断がつかない。

彼氏ならばすっぴんを見たことがあるのかな、という点に思いを馳せたとき、僕はあることを思い出した。そういえばなっちゃん先輩には彼氏がいるのだった。なっちゃん先輩はキャミソールとショートパンツ姿で僕の布団の上に寝ていて、僕はTシャツにトランクスという出で立ちで先輩の姿を眺めていた。とりあえずその辺にあったハーフパンツをはいてみたけれど、状況はあまり変わっていない。

このまま一緒にいると、僕が何かを間違えるか、先輩が寝惚けて間違えるか、どちらかが起こる可能性が高いと判断した。後者であればもしかしたらラッキーなのかもしれないと思ったけれど、その後起こるゴタゴタと天秤にかけるとどう考えてもマイナスだ。

たとえば、昨日の夜から僕がさっき目覚めるまでに、僕となっちゃん先輩との間に何かがあったとして、それはまったく問題がない。なぜならば、僕はそのことをまったく記憶していないからだ。故意でないものに罪はない。

しかし、たとえば今、僕が先輩の顔を眺め続けて襲われたら、僕はそれを振りほどく自信がない。また、僕がなっちゃん先輩のEカップの谷間をのぞいていることも実にけしからんことなのだ。その罰として、なっちゃん先輩の彼氏の靴を舐めさせられても文句は言えない。

そこで僕は、家を出ることにしたのだ。歯を磨いて、着替えて、講義に必要なものをリュックに詰めて。先輩には、置き手紙を残しておくことにした。

なっちゃん先輩へ

どうしてか、先輩は僕の家のトイレで寝ていました。昨日の夜に帰ったと思ったのですが、なぜまた僕の部屋にいるのでしょうか？僕は講義があるので、出かけます。冷房は入れっぱなしにしておきますね。家を出るときは、鍵は閉めなくてもいいですけど、冷房は切ってください。よろしくお願いします。

行くところもないし、何より外は暑いので、僕は手紙に書いた通り、大学へ行くことにした。最寄り駅まで歩いただけで、着ていたTシャツがしっとりと湿ってきた。電車の冷房でそれはすっかり引いてしまったものの、地下鉄を降りて構内の食堂に辿りつくまでに、またすっかり汗だくになってしまっていた。

まだ昼時には少し早く、僕は容易に食堂で席をとることができた。朝ごはんを先ほど食べたばかりでお腹は空いておらず、給水器から水を注いで、渴いた喉を潤した。冷房がよく効いているし、給水器の水はよく冷えている。

水を飲みながら、僕はなっちゃん先輩のおっぱいの感触と、鼻をつまんだときの可愛らしい拳動を思い出していた。よく考えると、僕は背中でおっぱいに触れたことと鼻をつまんだことだけで、十分に罪深いと思った。

そうは言っても、おっぱいに触れたことも鼻をつまんだことも消せない過去となってしまったので、僕はそれを「仕方のないこと」にしてしまって、未来の自分が罪悪感に苛まれないように目いっぱい努めた。

そんな風にして僕が僕の過去と戦っていると、高橋がやってきた。

「お疲れ。今日も暑いなー」

高橋はまず僕の肩を叩いてから「お疲れ」をはじめたので、僕は少しびっくりしてしまった。なっちゃん先輩のことを考えないようにしよう、ということを考えている最中だったため、プチパニックを起こし、高橋の胸の辺りを凝視してしまった。男の高橋に膨らみがあるはずもなく、

僕は思わず「そりゃそうだよな」とつぶやいた。

「何だよ、そりゃそうだよなって」

意図せず言葉が口から漏れるという経験を人生で初めてした僕は、お決まりのように「いや、別に何でもないよ」と返して、向かいに座った高橋との雑談に入った。

「高橋は今日、何限から？」

「一限から。二限はなくて、三限と四限。まあ、昨日飲みすぎたせいで、午前中の一限ガン寝したけど。夕方からバイトだから、午後も全部寝そうだなあ」

僕はまた嘔き出してきた汗をTシャツで拭い、「大変そうだな」と相槌を打つ。

「昼飯、もう食った？」

「いや、僕はさっき朝飯食ってこっち出てきたばかりだから」

「ふーん。ていうか、お前三限から？　なんでこんな時間からここにいんの？　ちょっと早くない？」

「うん、まあね。家の冷房壊れてるから、ちょっとここで涼もうかなと思って」

「え、まじで？　昨日は普通に動いてたじゃん」

「まあ、そうなんだけどさ」

この後、僕と高橋は半年後にはじまる就職活動の話をして、それぞれの講義に向かった。高橋は、その前にハンバーグカレーを食べていた。

三限が終わると僕はすることがなくなってしまったので、コンビニで週刊少年誌を立ち読みしてから家へ帰ることにした。外はまだとても暑かった。当然のことながら、僕は家に帰るまでに再びTシャツを濡らすほかなかった。

あまりにも暑かったので、僕は駅にある自動販売機でスポーツドリンクを買った。冷房の切れた部屋を想像するだけでうんざりした。

アパートの部屋の前まで来ると、ドアの前で小さなゴキブリが死んでいた。もしかしたら、僕がこの部屋を出るときに踏み潰してしまったのかもしれない。ここに帰ってくる途中、僕はたくさん蝉の死骸を見つけて、それを避けて歩いてきたというのに、それは徒労であったというのか。僕は干からびてしまったゴキブリを、足でつついて玄関前から少しずらした。

部屋に入った途端に違和感があった。そして、勘弁してくれよと思った。

六畳一間の僕の部屋はよく冷えていて、急速に汗が引いていくのを感じていた。ヒールの高い黒い靴が一足、玄関に置かれていた。

「まだいたんですか？」

なっちゃん先輩に言ってみたものの、なっちゃん先輩は僕が部屋を出て行ったときとほとんど同じ格好で眠っていて、僕の声が届いているとは思えなかった。

汗をかいていたのでとにかくシャワーを浴びたかったのだけど、この状況でシャワーを浴びてもいいものかとなっちゃん先輩の寝顔を眺めていると、時の流れを忘れてしまい、気がつけば汗

もすっかり引いていた。別にそろそろ起きてもいい頃だからと、なっちゃん先輩を氣遣うことなくテレビをつけた。

結局僕はシャワーを浴びて、ペットボトルに三分の一ほど残っていたスポーツドリンクを飲み干した。なっちゃん先輩が起きたら、喉が渴いたと言うかもしれないと思い、流しに溜まっていた洗い物の中から大きめのグラスを一つ洗って、乾かしておいた。冷蔵庫にはりんごジュースがある。でも、よく考えたらパックの豆乳も買い置きしてあったので、それを渡せばコップを洗わなくても済んだかもしれない。問題は、なっちゃん先輩が豆乳嫌いな可能性があるということだった。もうコップを洗ってしまったから、別にどうでもいいんだけど。

結局、なっちゃん先輩は夕方十七時まで死んだように眠り続けた。もう一度鼻をつまんでみよとかと数回考えたけれど、これ以上罪を重ねるわけにはいかない。

なっちゃん先輩は、高橋と付き合っている。もう二年くらいになるだろうか。僕もなっちゃん先輩も高橋も同じサークルに所属していて、僕がなっちゃん先輩をなんとなく可愛いなと思っているうちに高橋はなっちゃん先輩と付き合うことになり、まあ僕も他の女の子と付き合うことになった。

そして昨日、高橋となっちゃん先輩は僕の部屋に二人で遊びに来た。近くの居酒屋で飲んでいたら二人は、深夜二十三時に電話をかけてきて「今から遊びに行ってもいい？」と訊いてきた。いや来るなよと思ったけれど、僕は高橋のこともなっちゃん先輩のことも好きだし、三人で

飲むのは楽しそうだったし、ここで断っても角が立つので、仕方なく許可することにした。

コンビニでお酒とおつまみを大量に買ってきた二人に「どうして来たのか」を何度か訊いたけれど、「なんとなく」以外の回答を得ることができなかった。

二人は夜遅くまで飲んでた。僕も一緒になって飲んでいただけけど、時計で二時を確認して以降の記憶がない。なっちゃん先輩と高橋が「ばいばい」と言った声を聞いたような気もする。

僕は気付いたら布団の上でちゃんと眠っていて、気付いたらなっちゃん先輩と高橋は帰っていて、高橋は二限からの講義に出っていたのだ。そして僕は、実はトイレで眠っていたなっちゃん先輩を発見することになる。

なっちゃん先輩と高橋は、もうそれはそれは飲んだ。五百ミリリットルの梅酒二パックを飲み干し、床にはチューハイと発泡酒の缶がいくつも置いてあった。これは僕が片付けなければならぬのかと考えながら、一本の発泡酒と数本のチューハイを飲んだ。だから、僕もそこそこ飲んでた。

とにかく二人はよく喋り、とにかくよく笑うので、僕が会話に入り込む余地はほとんどなかった。しかし、少しの沈黙が訪れる度に二人のどちらかが僕に話題を求めてきて、僕が適当に話題をあてがうとまた二人で勝手に盛り上がってくれた。僕は二人のことが好きだったので、それを肴にお酒を飲んでた。

その飲み飲んで笑いに笑ったなっちゃん先輩がやっと起きて、不機嫌度十割の顔で僕に水を求めてきたので、そら来たと思って洗ったコップにりんごジュースを注いで渡してやった。なっ

ちゃん先輩はそれを一気に飲み干すと、「むかい酒、むかい酒」とつぶやきながら、すっかりぬるくなってしまった床に転がるチューハイに手を伸ばした。「とりあえず布団あげていいっすか？」と聞くと、「だめー」と言っって缶を手を持ったまま布団に寝転んだ。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

「あ、十二時くらいに一回起きて、置き手紙読んだよ」

「そうですか」

「冷房強すぎ。二十三度ってありえないでしょ」

「それ、昨日の夜、高橋となっちゃん先輩がガンガン下げたんですよ」

「このチューハイ何？　ぬるい。不良品？」

「冷蔵庫に入れてなかったらぬるくなりますよ」

「斎藤ってさ、当たり前のことしか言わないよね。つまんない」

「つまんないって……」

なっちゃん先輩はチューハイをあおって、キョロキョロしはじめた。スマホを探しているのだと気付いて、机の上に置いてあったそれをなっちゃん先輩に渡す。「さんきゅ」と短く言っって、通知を確認しはじめた。

「うわ、めっちゃ来てる」

「僕、朝起きても三件しか来てなかったっすよ」

「斎藤は友だち少ないから」

それに対して、「ちょっと、それどういう意味ですか」と返したけれど、友だちが少ないには別に他に意味があるわけでもなく、僕に友だちが少ないのも事実だった。そうか、僕は友だちが少ないのかと噛み締めていると、「昨日、高橋と別れてさ」となっちゃん先輩が言いはじめた。

「え、昨日ですか？」

「そう、昨日です」

「昨日のいつ？」

「ここに来る前」

「えっと……つまりそれは、二人は別れた状態でここに来たってことですか？」

「そうですね、別れた状態でここに来たことになりました」

なっちゃん先輩はチューハイを飲みながらメッセージを作成している。別れた状態って何だよ、と僕は自分の言葉に心の中でつつこみを入れながら質問を続けた。

「どうして別れたんですか？」

「うーん、なんとなくかな」

「なんとなくって……なんか理由あるでしょ」

「じゃあ、斎藤はどうして今の彼女と付き合ってるの？」

「それは……」

「なんとなくでしょ？」

「別になんとなくではないですけど」

「でも、今すぐ理由を言えないなら、なんとなくみたいなもんだよ」

なっちゃん先輩はとて自由である。僕は何か別れるための決定的な理由、たとえば浮気とかが欲しかったのだけど、どうやらそういった明確な原因があるわけではないらしい。

「で、別れた状態で飲みに行って、別れた状態で僕の家に来たんですか？」

「いやいや。居酒屋で別れて、別れた状態でそのままちょっと飲んで、別れた状態のまままでこまで来たの」

「そして、今も別れたままの状態ということですか？」

「そういうこと」

僕は思考を一旦整理するために意味もなく立ち上がってみたけれど、それで思考が整理されるわけでもなく、大好きな豆乳を冷蔵庫から出して飲むことにした。半分ほど飲んだところで何とか落ち着いてきて、そういえばさっき高橋と会ったことを思い出した。

「そういえば、さっき高橋と会いましたよ」

「あ、そうなの。元気してた？」

「まあ、昨日の今日だから元気でしたけど」

「彼女と別れたなら普通、昨日の今日で元気じゃないよね」

「だって、なっちゃん先輩も元気じゃないですか」

「元気じゃないよ。喋り疲れて笑い疲れて二日酔いだよ」

延々メッセージを作成しているなっちゃん先輩は、一体誰と交信しているのだろう。

その後も質問を繰り返したけれど、起き抜けにチューハイを二缶空けて誰かと交信し続けるなっちゃん先輩は、僕の質問を適当に受け流し、高橋となっちゃん先輩が別れた状況であるという以外の情報をつかむことができない。それでも無音は気まずいので、適当に質問をぶつけていると、なっちゃん先輩はスマホを置いて交信をやめ、僕にこう訊いてきた。

「ねえ、寝てる間に、変なことした？」

瞬間、僕は背中になっちゃん先輩のおっぱいの感触を思い出した。次いで、食堂で見た高橋の胸を思い出した。僕は「するわけないじゃないですか」と言っ、手でおっぱいに触ればいいという誘惑に負けなかった自分を最大限に褒めた。

「そっかー、寝てる間なら、何してもわからなかったのになあ」

どう返していいのかわからなかったし、なっちゃん先輩は依然としてノースリーブ姿であることを思い出して目の遣り場に困り、ちょっと残っていた豆乳を飲んで喉を潤した。「まあ、そうですね」と応えてもおいた。

正直、僕はドキドキしていた。たぶんこれは誘われているのだとも思った。確信に近かった。しかし、その確信が間違いだっただとしたらこれは大失態だし、確信が当たっていたとして、僕はまた罪悪感に苛まれなければならない。

二十三度に設定されたエアコンは唸りをあげて、僕らに冷風を送り出している。その温度は僕となっちゃん先輩を指先まで冷やし、しかし僕らの体温は確かにそこに存在していた。

リグレット

佐藤 稿介

安藤夏希は極めてガサツという言葉が似つかわしい性格であった。高校生になったのだから、少しは女の子らしくしてほしいと彼女の母は言うが、夏希はその言葉も自身のことさえ露ほども気にかけていない。

しかしそれは夏希が素行不良であるとか、手が早いだとか、そういう一般的に言う『悪』な性質という訳ではない。

器は広い方だ、と友人は口にする。いつも元氣滲刺に、明るくて面倒見がよく、誰にでも対等に、心からの本音で接する。悪く言えば馴れ馴れしいとも形容できるのだが、そんな彼女を邪険にするような人間は、少なくとも中学時代にはいなかった。まあ、現在彼女が謳歌している高校生活においてもそうなのだが。自然と周りに人が集まる、そんな人物だ。

友人曰く姐さん氣質、と本人にしてみれば自覚のない話であるので、夏希は反応に窮しつつ苦笑いするしかないのであった。

高校生活が始まって数ヶ月。夏希はクラスの面々とも打ち解け、無自覚の世話好きな性質を發揮したおかげで、さしあたりは快適な学校生活を送れることとなった。

朝のホームルーム。夏希のクラス担任が、その低い声で名前を呼び上げていく。

夏希の出席番号は一番。恒例行事のように呼ばれる名前に短く返事をし、息をついた。

「あー、江藤冬馬……またいないのか」

と、中年の担任は呆れたかのような、諦めているかのような溜息を漏らした。

夏希の席のとなり、出席番号二番の江藤冬馬。彼がこのように自分の席の所有権をむざむざ手放していることは、今に始まったことではない。

不登校、というやつではない。事実彼は学校には来ているし、机に彼の姿はなくとも彼のよれの肩掛けバッグだけはぼつんと置かれている。

では、何故？

答えは簡単。ただ単に彼が自身の教室でないどこかへ行っているだけなのだ。それも、不定期に。自由気ままに教室に来たかと思えば、またどこかへ行ってしまうこともある。

そんなことを繰り返しているのは教師からの呼び出しやお説教は避けられないかと思うが、それもまた違う。

先ほどの担任の言も含め、冬馬の成績優秀さから黙認というやつを受けている。授業を受けな

くとも中間テストでは一位を取り、さらには特待生。別段素行不良というわけでもない。非の打ち所というものが、冬馬には全くなかった。

ただ、毎度教室に居合わせないのが常であるのだから、当然のごとく冬馬はクラスで浮いた存在となっていた。交友関係さえ、誰にもわかっていない。勿論、夏希にも。

しかしそのことで冬馬に悪い噂が立つだとか、本人の預かり知らぬところで陰口を吹聴されているわけではなく、冬馬のその能力の高さ、学年でも上位であろう容姿のおかげか彼の行動全てがプラスの側面として捉えられていた。

当人の意思とは関係なしに祭り上げられるのは、よくある話だ。

が、夏希は、当初冬馬という人物はあまり好ましく思えない、と感じていた。

気前が良いとは言っても、ズル不正には人一倍敏感な公平主義者であったのだから、そんな頭の良さにかまけて授業をサボるなど言語道断、と内心憤っていたものだった。このとき、夏希自身の成績のほどは、関係ないものとする。

そんな夏希の冬馬への意識が色を帯び始めたのは、ある朝のことだった。

たまたま朝早くに学校へ来た夏希は、その日の授業を憂鬱に思いながらも教室のドアを開けた。夏希の視界に入ったのは、窓際の席から外を眺める冬馬であった。

ドアを開けた音にも気づいていないのか、微動だにせず、物憂げな表情でただただ外を眺めているようだった。

夏希は何故かそんな冬馬から目を離せず、入口に立ったまま冬馬を見ていた。

「何、突っ立ってんだ？」

入口に目を向けずに、冬馬は呟くように言った。ドア付近の人物を夏希と認めていないものの、ドアを開けたのには気付いていたようだ。

「っえ、あっ、えっと……！ お、はよう？」

完全に不意を突かれた夏希は、戸惑いつつもとりあえず挨拶をし、少し離れた自分の席に逃げないように座った。

そうしたまでは良かったが席に着いた途端、二人きりという事実に恥ずかしさがこみ上げ、顔が熱くなるのを感じた。他の生徒が来るまでに二人はそれ以上の会話は交わさなかった。

その一件の後、夏希は冬馬を見ると、えも言われぬ感覚に襲われるようになった。それが恋心だということに彼女が気づくには、そう時間はかからなかった。

単純な話に聞こえるが、元々、夏希にとって冬馬のような人種は目新しいものだった。

勝気な黒髪短髪な少女は、異性相手でも易易と自分のペースに引き込んでしまうほど私の強い質だったため、自分のことをあまり気にも留めない少年の登場は、思った以上に唐突で不可解だった。

そうなれば冬馬の挙動の一つ一つが気になりだしたし、席替えによって彼と列を挟んで席が隣になったときは、内心小躍りしたくらいである。

しかし、夏希は少し焦っていた。

今は七月。期末テストも終わり、もうすぐ夏休みだ。そうなれば、冬馬との接点が完全に無く

なってしまうからだ。

学校の中で声をかけることができればと思っていたが、教室にいたことが少なく、教室にいたとしても舞い上がってしまい、緊張も相まって声が出なくなってしまうていた。

さらに、冬馬と同じ中学の者が一人もおらず、親しい人物を介して交流を深めようと思っていた夏希は、もう打つ手がなかった。

こうなればもう授業中どこにいるかを突き止めるために、学校中探しまわるしかないと数日前に決意し、休み時間ごとに校舎を走り回っていた。もとより頭の弱い彼女はこれが最善策だと、授業に遅刻するのも構わずに毎日これを繰り返していた。

今日もまた、朝の挨拶が終わると椅子から勢いよく立ち上がり、どこに行くのかと尋ねてくる友達を笑顔で流しつつ、冬馬を探すのであった。

とは言っても、この数日間で学校内の様々な場所を探していた。

それはもう、校舎の中から外にいたるまでありとあらゆるところを探し尽くした。

時間帯によっている場所が違うのかと、持ち前の脚力と体力で何度も同じ場所を往復した。一時は家に帰ったのかと思ったこともあったが、教室に荷物を置いているのでそれはありえないと、すぐにその考えをかき消した。

そうして、夏希は焦りとともに苛立ちを感じ始めていた。

「…はあ。私、何してんだろ……」

広い校舎内を走り回ったにもかかわらず、夏希の口から出るのは荒い息ではなくぼやきだった。上着のポケットから取り出した最新式の携帯端末のディスプレイをタッチすると、画面には「8:43」という数字が浮かんだ。そろそろ一限目の授業が始まってしまいう時間である。

普段なら全速力で教室に戻るところだが、夏希はそういう気分になれず目に付いた階段の一段目に腰を下ろした。夏真っ盛りであるのに、スカートの上からコンクリートの冷たさがじわりと伝わってくる。

ふと辺りを見回すと、人気がないことに気づく。ああ、この上は屋上だった。だから人が集まらないのだ。と、取り留めもないことを思い出す。

同時に屋上はまだ探したことがなかったことに気づき、階段上に見える無機質な扉を振り返った。しかし、屋上は校則では立ち入り禁止になっており鍵がかかっているはずだった。

そう思った夏希は、再び階段に腰を下ろした。

——でも、もしかしたら。

夏希は再度立ち上がり、勢いよく階段を駆け上がった。少しの可能性でも縋りたかったのだ。

小窓もついていない扉の前に立つと、薄暗さとその圧迫感に少なからず恐怖を覚えた。ドアノブを握ると思いのほか冷たく、夏希は思わず鳥肌が立ってしまった。

ドアノブを回してみると、一切の手応えもなくドアノブはすんなりと回った。

「開いて……?」

重い扉を引くと、慣れない太陽の光に一瞬目が眩み、閉じた瞼にじわりと水の膜が張った。

硬いコンクリートに足を踏み入れると、ザァッと視界に青空が広がり、打ち付ける風に夏希は思わず息を飲んだ。

しかし、屋上には探していた人物は見当たらない。もしかしたら、と期待していただけに落胆の度合いもひとしおだった。

そうして、もうチャイムが鳴るだろうかと思考を巡らせていた夏希に、不意に横合いから声がかけられた。

「安藤……夏希だったっけか……?」

「……え? うわぁっ!」

声のする方を振り返った夏希は、飛び込んできた光景に驚き、仰け反った拍子に尻もちをついてしまった。

夏希の目の前には、探していた江藤冬馬その人がいたのだ。

冬馬は不思議そうな顔で夏希を見ていた。

「……で、何でここにいんの?」

「いやそれは、私のセリフなんだけど……」

まさか扉のすぐ横に冬馬がいるなど知る由もなかった夏希は驚き、さらには尻もちを付くとい

う醜態を晒してしまっていたので、これは最悪のファーストコンタクトになってしまっただろうと若干青ざめながら冬馬に応対している。もっとも、名前を覚えてくれていた点では内心驚きつつも喜んでいた。また、少しの距離を置いて隣同士で座っている状況には、緊張を覚えていた。

一方冬馬は、夏希がいることに対して別段驚きもせず、大きな欠伸をしたり空を眺めたりとマイペースの体だった。

「先生に探してこい、とか言われたのか？」

「い、いや別にそんなんじゃない……」

「じゃあ、何で？」

空から視線を移して夏希をまっすぐに見つめる冬馬に、期せずして顔が赤くなるのを夏希は感じていた。

「あ、あの、ほら！ 私もちよっとサボろうかなあって思ったってゆうか！ そしたら偶然ここに来て、ね？ うん、そんな感じ」

まさか冬馬を探していたなんてことは勿論言えず、不審な身振り手振りをしながらも夏希は精一杯の言い訳をした。

冬馬はそれを聞き「ふーん」と言うと、夏希から視線を外した。

再び訪れた沈黙。

夏希は元より雑談に花を咲かせられるような甲斐性は持ち合わせていない。さらには意中の冬馬と二人きりということで緊張は頂点に達していた。

普段使わない頭をフル回転させ、ようやく浮かんだ言葉は純粋な疑問だった。

「そ、そういえばさ。なんで屋上の鍵、開いてたのかな」

夏希のもっともな質問に、冬馬は無言で自分のポケットから針金を取り出した。

針金と呼ぶにはもうすっかり変形しくたびれたそれを、冬馬は目の前でぶらぶらと弄んでいる。

「…もしかして、それで開けたの？」

夏希の問いに、冬馬は無言で頷いた。

疑うわけではないが、夏希は、冬馬がそのようなことをするとは思っていなかったため、意図せずして押し黙ってしまった。

「…別に日頃からこういうことしてるわけじゃないし。勘違い。すんなよ」

あまりにも的を射ていた冬馬の発言に、夏希は慌てながらも、

「そそそ、そうだよね！ あっはは！」

安堵と勢いのせいで、夏希は立ち上がって豪快に笑ってしまった。

それにつられた様に「変な奴」と、冬馬も小さく笑っていた。

初めて見た冬馬の笑顔に夏希は、徐々に持ち前の快活さを取り戻し、冬馬に次々と言葉を投げかけた。

「じゃ、じゃあなんで屋上なんかにいんの？ それも授業までサボって…」

今まさに夏希自身も現在進行形で授業をサボっているわけだが、それを自覚しながらも冬馬に訊いた。

「暇だしな」

「授業が暇って…。それで、あの成績？」

「嫌味か…。俺も思った」

「ど、どういう意味よ！」

冬馬が憎まれ口を叩くたびに夏希が怒り、それを見た冬馬が笑い、夏希が赤面する。

そんなやりとりが、しばらくの間続けられた。

その時間が、夏希には長くそして終わってほしくないと考えていた。

なにせ、冬馬と接触してもまともな会話ができないだろうと考えていたから尚更だ。夏希の想像以上に冬馬はよく喋り、笑った。

ここまで饒舌ならば、クラスでも浮くことなく溶け込めるのではないかと夏希は思った。しかし、この声と笑顔が自分だけが知っているものだという少しの優越感から、その考えは次第に消えていった。

夏希と冬馬の間を、心地よい風が廻っている。

そうして時間は、ゆっくりと過ぎていった。

「じゃあ、そろそろ戻るね」

一時間目の終わりを告げるチャイムが鳴り、夏希は立ち上がった。

授業をサボり続けても大して注意されない優等生の冬馬とは反対に、成績が芳しくない夏希は

あまり授業に参加しないと、どんな減点がされるか解ったものではなかった。

そのことを理解してか、冬馬も別段驚きもせず、ひらひらと手を振った。

ドアノブに手をかけると、さっきまでの会話が、まるで走馬灯のように夏希の頭の中で再生された。

このまま行ってしまえばもうここに、冬馬のところに来られないのではないかという思考が膨らんでいった。

いつまで経っても出て行く気配を見せない夏希を、冬馬は不思議そうな表情で見ている。

「おい、どうし——」

「そ、そっちが、構わないなら！」

夏希は一気に冬馬の方を振り返り、かけられた声を遮りながら言った。

「また、ここに……来ても、いい……?」

夏希の言葉に、冬馬は僅かに目を見開いた。夏希は、本日幾度目かの顔の紅潮を感じながらも、返事を待った。

冬馬は次いで目を伏せ、静かに笑った。

「俺の場所じゃないし、別にいいぞ」

「いいの?」

「……ああ」

「決まりね!」と、夏希は子供のような笑顔を浮かべた。この上ない喜びを感じ、ぶんぶんと

手を振りながら再びドアノブに手をかけた。

だからかもしれない。夏希は、冬馬の寂しそうな、そして悲しそうな笑顔に最後まで気づかなかった。

真夏日。

今日もまた、夏希は冬馬のいる屋上へと向かっていた。

数日前に取り付けた約束により、一限目だけ冬馬に会いに行くことになっていた夏希はいつもの意気揚々とした心持ちと、複雑な思いを抱えていた。

二人きりで会ってはいるものの、まだ二人の距離は「普通の友達」といったところだった。夏希自身が冬馬を好いていることを時折忘れるくらいなのだから、冬馬も恐らく自分の好意には気が付いていないのだろう。

そう考えると、夏希は段々と気分が沈んでいくのを感じた。

慌てて顔をぶんぶんと振り「今日こそは……！」と、持ち前の前向き精神で持ち直し、冬馬の顔を脳裏に浮かべるのだった。

屋上のドアを開けると、初めて来た時と同じように青い空と風が、夏希を迎えてくれていた。そして今は。

「よう」

「お、おはよう！」

入口横に座る冬馬が、静かに笑って夏希を迎えている。

入口を挟んで隣に座ると、夏希はこう切り出した。

「明後日から、夏休みだよね…」

「え、そう…なのか」

初めて聞いたと言わんばかりの冬馬。

禄に授業にも出ないのだから、冬馬の学校行事への関心そのものが薄いのだろう。実際体育祭のときは当日連絡を取りつけてようやく参加に至ったほどである。それを思い出し、夏希は呆れたように笑った。

「私さー、補習食らったんだよねー」

「あー、そういや俺もだな…」

「…ええ？」

「え？」

補習勧告を受けた自分を馬鹿にするだろうと思っていた夏希は、予想外の返答に驚きを隠せないでいた。

「ほら、俺サボってばっかです。成績良いらしいけど、欠課が多いから」

「ああ、そう。成程ね…。ていうか何で授業出ないのに頭良いのよ…」

小さく笑いながら「なんでだろうな」ととぼけたように呟く冬馬。

そんな冬馬をよそに、夏希は内心喜んでいた。それはもう、声に出してこの気持ちを表したいくらいに。

明後日から夏休みということで、この時間が無くなってしまふことを恐れていたが、これで冬馬に会うことができる。この時ばかりは自分の学力の低さに、ひれ伏して感謝したいくらいだと夏希は思った。

その後も他愛のない話が続き、一限目終了まで残り半分といったところだろうか。

不意に、冬馬が呟いた。

「お前。好きな奴とか、いるのか」

あまりにも突然すぎて、頭の中が真っ白になった。夏希は追いつかない思考で、今出た単語を急いで整理しようとする。

意味を理解した瞬間、夏希は顔が紅潮するとは逆に、冷や汗が吹き出てきた。

「い、いいきなり何！ 何訊いてんの!？」

思わず立ち上がり、一歩後ずさりする。

「いやだから、好きな奴。いっつも俺みたいな変人のとこに来てさ。そういうのとか考えてねえのかなあーって」

いや、まあお前みたいにガサツなやつってそんなもん興味ないのか？ といっつものかげい口調で冬馬は付け加えた。

その問いの答えとなる人物が今まさに目の前にいる。そう考えると次は冷や汗が止まり、顔に熱が集まるのを感じた。

まさか、まさか彼には心当たりがあるというのだろうか。

「もしかして、俺とか？」

言い終えてすぐに冗談だよともいう風につらつら笑う冬馬は、しっかり正解に行き着いてい

る。
そうなると夏希としては「冗談じゃない」という気持ちがかみ上げてきた。

でも、これは、いい機会かもしれない。そう夏希は思った。

このまま屋上で会い続けていても、それは多分「友達」という関係までしか築けないだろう。正直、どこかで想いを告げなければいけないと薄々は感じていた。そして今、こうして言い出さずきつかけを、冬馬自身を与えてくれた。

「？ おい、どうしたんだ？」

元の位置に座り、精一杯に真剣な顔を作り、夏希は冬馬を正面から見た。

「おい、マジでどうし——」

「正解」

泣き喚く蝉の音が。吹き荒れる風の音が。さっきまで煩かった鼓動の高鳴りが。すべての音が、夏希の中で消えた気がした。

「は？ せい…かい？」

未だに意味を理解できないのか、冬馬は首をかしげている。まるでさっきまでの夏希のようだった。

が、数秒もすると、解ったとでも言うように静かに笑った。寂しそうな、悲しそうな、顔だった。冬馬がこんな顔をするのは初めてだったものだから、夏希は、あんな顔もできるんだ、と小さく思った。

冬馬も夏希も、何も言わなかった。

「…ごめん」

痛いほどの静寂に耐え切れず、夏希の口は勝手に言葉を紡いでいた。

「何で、お前が謝るんだよ」

冬馬は正面に向き直り、遙か遠くの峰を見据えているかのようだった。

その横顔からは、いつもの飄々とした印象は感じられず、何かを悲しんでいるように見えた。それが、夏希の目には、あのひとりきりの教室の物憂げな表情と、重なるように見えてしまった。そんな冬馬の反応から自分の気持ちが悪感だったのかと予想すると、目尻が熱くなった。

「だって、迷惑…だったん、でしょ……？」

夏希の言葉に冬馬は大仰に溜息をつき、予想だにしていなかった言葉を発した。

「お前さ」

冬馬はひとつ息をついて、夏希を真正面から見据えた。

夏希は冬馬の黒曜石色に魅入られる。神妙な顔をした自分が、その瞳の奥で囚われているかの

ような錯覚に、目眩がする。

「人から結構好かれる方だろ？」

全く脈絡のない問いかけ。

なぜ今そんなことを？ と夏希の思考に過ぎだったが、冬馬の今まで見たことがない真剣な表情の前では、そんな疑問は些細なことであった。

「お前の性格なら、そうなんだろう、な。どんなやつにも好かれて。お前もそれが幸せなことなんだろ？」

自分が望んだこと、そう暗に問われていることに気づいて、夏希は頷いた。

どれだけ母親に口酸っぱく女の子らしくしなさいと言われても、夏希は露ほどにも気にしない。それが、自分の在り方なのだから。誰に決められたものでもない、自分らしさ。その生まれ持ったの性質が、自分ではない誰かに受け入れてもらえることは、この上なく幸せなことであるのだろう、と夏希は考える。

「……よく、ある話だよ」

冬馬はひとつ、目を伏せて語り始めた。

よくある話だ。

子供時代、学校という場では当人の意志とは関係なしに、社交上「強い人間」として扱われてしまうことがある。それはまるで祭り上げられるように、烏合の衆とも呼ばれる人種が、確固たる象徴を持ちたいがために行われる行為だ。

無論それが祭り上げられてしまう人物の意向に沿った上での結果であれば、何も問題はないだろう。

しかし、この少年の場合は別であった。

少年は人一倍頭が良かった。運動もできた。ルックスも、良い部類に入る人間だった。

そこに目をつけたのが、俗に言う自己主張の強い者たち。能力の優れたものに、長いものに巻かれていたいと無意識のうちに画策してしまう者たちであった。

お前はそういう人間だろう、俺たちと、同じ人間なんだろう？ と、少年は自分にはまるで興味の無かった領域へとなし崩しに引き込まれてしまった。

少年の内面としては、元来彼は地味な人間であった。スクールカースト上位とも言われる派手な人種とは、あまり関わり合いたいと思うことはなく、ただ平穩に仲の良い友達を作って過ごしたいと思うばかりであった。

：ただ、正直に白状すれば、少年にとって祭り上げられることはそこまで悪い気のあるものではなかった。

子供たちだけのごくごく狭い社会の中であれど、常に上からすべてを見渡せることは、途轍もない優越感を得られる行為であった。上位のグループのみに許される噂話をし、それに興じられ

る権利。私の弱い幼子たちが垣間見せる羨望の視線。至極愉快で、悦びであった。

少年がそれと引き換えにしたのは、大好きだった本を読むこと。根暗だと呼ばれるから。きっとお前らしくないと言われてしまうだろう。

自分の読む、比較的名の通っていない本の話題で、自分の取り巻きから地味な奴と蔑まれていたクラスメイトと語り合うこと。自分の今の地位を、失ってしまうと思つたから。

少年は元から持っていた自分を、すっかり捨ててしまつていた。いや、捨てさせられた。そうして、少年の在るべき姿を押し付けられ決められてしまった。と、月日が経って被害者ぶるのは簡単だ。

ただ、自分が大事だっただけだというのに。

そんな少年にも好きな人がいた。

中学三年生の頃、同じクラスになった秋という少女。平均よりさらに小柄で大人しく、三つ編みが艶やかな黒髪に似合っていた。

本が好きだったらしく、いつも騒がしい教室の中でひとり読書に耽っていた。よく少年の好むタイトルを読み進めていたのも、少年が想いを寄せた理由のひとつだろう。

とはいえ、前述した事情により、少年は秋に対して言葉すら交わしておらず、日々眺めてもどかしさに苛まれる毎日を送っていた。

加えていうのなら、秋ははじめを受けていた。

いつどうやってそれが始まったのかは、その全貌は少年の知るところではないが、なんでも地

味なくせに容姿に優れていて、クラスの派手な女子に妬み僻みを買ってしまったことが原因であるらしかった。

それでも秋は、陰口やものを隠されるなどの陰湿な行為に、怒るのでもなく泣くのでもなく、ひっそりと静かに耐え忍んでいるかのようだった。その様子に、クラス内でのいじめはさらに広がっていき、とうとう少年を除く全てのクラスメイトに嫌われてしまうことになったのだった。

少年は何もしなかった。何も、できなかった。できることがあったのに、救うことができたのに、それをしなかった。

ある日の朝。登校した少年が教室の引き戸を開けると、何かとぶつかかった。

秋だった。ちょうど教室から出ようとしていたのだろう、体格差も相まって、秋の方が一方的に弾き飛ばされてしまった。

少年は無意識のうちに「大丈夫？」と声をかけ、その細い白い手を取ろうとした。

しかしその瞬間、教室中の視線が自分に集まっていることに気がついた。『何で文句を言わないの？』『あいつもしかして——』などという呟きが、あちらこちらから聞こえ、少年の脳内を占拠する。

少年はその場に固まってしまった。じりじりと背中にかけて嫌な汗が流れ、そのせいで皮膚にまとわりつくシャツがひどく不快だった。

秋を見ると、何とも言えない、申し訳なさそうな顔でこちらを見ていた。息が詰まりそうだっ

た。

『自分』と『秋』を、少年は天秤に掛けた。指先一つで大きく傾いてしまうはずのその天秤は果たしてどちらへ傾いたのか。

触るな、汚い、ブサイク、チビ、謝れ。

少年は、普段の自分なら思いつきそうもない罵倒の言葉の数々を、秋に向かって、自分の想い人に向かって思い切り叫んでいた。

気がついたときには周囲は歓喜し、秋を笑っていた。

少年はそのまま秋を通り過ぎ、自分の席に着いた。すぐに友達が集まり、あんなことを言った少年を褒め称えるような、そんなことを言っていた。

少年の耳にはそんな騒音が入ってくるはずもなく、身体中全てを罪悪感と後悔が支配していた。重さに耐えかねて、潰れてしまいそうになるくらいに。

そのとき少年は秋を振り向くことができず、秋が泣いていたかさえ、解らなかった。そしてその日から、少年が望まぬ形で秋へのいじめに参加してしまうことになったのだった。

また、ある日の放課後。珍しく教室に忘れ物した少年は、一人夕焼けの照らす廊下を歩き、教室へと向かっていた。

辿りついた教室で開いていた後方のドア。

そこから見えたのは、窓際の席に座り、静かに泣いている秋の姿だった。

少年は息を呑んだ。いったい何をしているのだろうかと考える暇もなく、あの少女の置かれている現状を反芻し、吐き気がした。

少年は思わず声をかけようとしたが、固く閉じた口が当然のごとくそれを許さず。

一体、何を言うつもりだ？ 自分の立ち位置が大事であんなことを言った、したとでも言うつもりか？ 自分の身可愛さに、君を助けることができたのに、それをしなかった、と。

少年は頭の中で、何者かにそう嘲笑われているような感覚に襲われた。

秋は少年に気付かず、ただただ涙を流していた。

嗚咽も漏らさず、どこか遠くを見ているようなその横顔に、自分の下劣さが。汚さが。呈されているようだった。

少年はそれに耐えられず、逃げるように教室から離れていった。

『秋が自殺した』

翌日のホームルームで教師が口にした言葉に、少年は耳を疑った。

クラス中がざわつき、慌てる中で、少年は自分の中で何かが壊れる音を聞いた。いや、最初から壊れていたものが、さらに粉々に砕かれてしまったのか。

理由は解らない。昨日の放課後。屋上から。飛び降りた。

教師は、嗚咽混じりの声で経緯を説明していた。それさえ、少年の耳には入っておらず。

教師は、何か心当たりがある者はいないかと問いかけた。真実を告げる者は、一人もいなかった。

た。その少年も含めて。

数日後、少年は教師を通じて、秋の両親に呼び出された。

それを受けた少年は、もしかしたら遺書が何かの形でいじめが告発されているかもしれない。だとすれば、いじめのことを全て話し謝ろう。決して許されるものではない。でもそれが、自分でできる唯一の償いだ。少年はそう思った。

校舎の一角に設けられた面会室に入ると、テーブルを挟んでソファが向かい同士に並んでおり、その一つに秋の両親が座っていた。優しそうな、人たちだった。

二人は少年を見た瞬間、柔和な笑顔を浮かべ、もう一つのソファに座るよう促した。少年は、秋の両親の反応を不思議に思いながらもソファに座った。

すると、秋の母親がバッグから手帳のようなものを取り出し、少年に手渡した。B4サイズのそれを、少年は頭を下げ、両手で受け取った。

表紙には『diary』と書かれており、日記かなと少年は予想した。

秋の父親は『読んでみて』と言い、いまいち状況が飲み込めていない少年は言われるままに、書き連ねてある文字を読みすすめていった。

大人しい、いい子だった。本当に残念でならないし、私たちも悔しいと思っている……が、この間その日記を見つけてね。秋はずっと君のことが好きだったらしい。苦しい中でも、ひとりだ

け声をかけてくれたらしいね。本当に、ありがとう。君が江藤……ああ、そうだ、冬馬くんだったんだね。

秋の父親は、だいたいそんなことを話していた。

日記の内容は、いじめについてを綴ってあるものだった。その日その日のことを、事細かに、誰にも言えないことで秋は相当苦しんでいたのだろう。

ただ、ひとつの虚言が紛れ込んでいたのに気付いたのは、秋の両親ではなく少年だった。それもそうだ、少年本人に関わることだったのだから。

少年は泣いた。秋の両親の目があるのも構わずに、秋の日記を、まるでその持ち主を抱きしめるかのように泣いて、蹲った。

あの罵りが、どうすれば支えの声に、救いの声になったのだろうか。秋というひとりの少女は、その最期まで、少年のことが好きだったのである。

最初から重りが仕込まれていた天秤を、見て見ぬフリで見過ごしていたのは、少年の傲りであり、怠慢であり、自愛であり、罪だった。

その後、少年は他県への高校受験を理由に、罪の敷かれた地を去っていった。どこまでも弱虫な少年を、けれど責める者は誰もいないのに。

…よく、ある話だ。

冬馬はそう話を結んで、空を仰いだ。

「世の中には、とんだ馬鹿がいるもんだよな」

呆れたように笑う冬馬は、やはり悲しそうで、寂しそうだ。そしてさっきより、それが顕著に表れていた。

「今の話って、あんたの——」

「お前は」

夏希の言葉を遮った冬馬は、今までに見たことがないくらい冷たい表情だった。

何者にも触れさせない、ドライアイスのような。

病気になるようなほどの日差しの中だというのに、夏希は寒気に襲われた。

「そういうどっかの馬鹿な奴を……好きに、なったりするなよ」

言い終えると、再びいつもの軽い笑顔に戻っていた。

夏希は何も言えず、初めて出会った時のような静寂が痛い。

「……なんで、そんな話をしたのよ？」

胸の締め付けられていた彼女がようやく絞り出した言葉は、やはり疑問の言葉だった。

正面に向き直った冬馬は、立ち上がりざまに、

「さあな……ただ、決心はついたかな」

意味深な言葉を残して「じゃあな」と言いながら冬馬は屋上から出て行った。

追いかけてようとしたが足が動かず、夏希はずっとそこに座り込んでいた。最後に見えた冬馬の背中からは、ただただ後悔の念を感じるだけだった。

時間はかなり過ぎていたように思っていたが、一限目の終わりを告げる鐘は、まだ鳴っていない。

ようやくのことで動けるようになった夏希が教室に戻ると、冬馬の席の荷物はなくなっていた。すぐさま友達に冬馬の所在を尋ねると、珍しく教室に戻ってきたと思ったらそのまま早退したということだった。

何故そんなことを訊くのかと不思議がる友達に苦笑しながらも、夏希は自分の席に着いた。

荷物のない冬馬の席は、なんだか違和感があった。

まるで今まさに進んでいる時間に、取り残されているようだった。

その翌日。

いつも通り冬馬は教室におらず、荷物が置いてあるだけだった。

朝の連絡を終え、教師は教室から出て行った。

途端に教室には騒がしい空気が戻り、けれど教室を出て行く者もちらほらといた。そういえば

この次は終業式だなどぼんやり思った。

頼杖をつきながら、夏希は昨日の冬馬の言葉を考えた。

冬馬がした話の少年は、冬馬自身。そして、冬馬が好きだった秋という女の子は自ら命を絶った。

まるで何かの物語のような悲しい話。昨日は混乱してしまい、よく解らなかったが、あの後すぐに涙が出たくらいだ。

冬馬に好きな人がいた、というのに驚く暇もなく、そんなことがあったのを受け止めるので、夏希の思考は既にキャパオーバーだった。

冬馬はどんな気持ちだったのだろう。悲しかった…なんて言葉では恐らく片付かない。冬馬の言葉通り、まさに『自分で殺してしまった』ようなものだから。

「決心がついた…:…?」

冬馬の言葉をなぞるように呟くと、夏希には最悪の考えが浮かんだ。

自殺。飛び降り。後悔。屋上。

「ま、さか…冬馬…:…?」

うわごとのように彼の名前を呼んだ。しかし返事はもちろん無い。

それに気づくと同時に机を叩き、夏希は椅子から立ち上がる。自ら椅子を蹴り倒すのも構わずに、教室から飛び出た。自分を呼ぶ、友達も無視して。

冬馬と会うために通っていた、人気のない廊下。いつもここを通るときは心が弾んでいたのに、

今は違う。

冬馬は、自ら死ぬつもりなのかもしれない。

あいつは「決心がついた」と言った。もしかしたらそれは、自分の罪を、過去を償う決心だったのではないだろうか。

——だとしたら、冬馬は。

階段を二段飛ばして駆け上がり、重い扉を勢いよく引いた。

襲いかかってくる太陽の光にも屈さず、いつも冬馬がいるすぐ横を見た。いない。じゃあどこに。

正面を見ると、転落防止用のフェンスの前で立ち尽くす、冬馬の姿。

「…んの、馬鹿っ…！」

よじ登れば簡単に屋上から飛び降りれるそのフェンスは、より一層危機感を煽った。

だから、夏希は全力で冬馬のもとへ走った。そんなに遠くないはずなのに、冬馬のいる場所がまるで隔絶された場所のように近づけない。それでも、走った。

手を伸ばし、冬馬の首根っこを掴み、思い切り引き倒した。

渾身の力で引いたおかげか、冬馬はすんなり倒れた。

「ってえな！ 何すんだ！」

「それはこっちの台詞よ！」

腰を打ったからか、はたまた自分の行為を阻止されたためか、冬馬は怒気を帯びた声で叫んだ。

夏希も負けじと、叫んだ。

「…は？ え、夏希？ お前何して——」

「だからそれはアンタの方でしょ!？」

引き倒したのが夏希であると認識した瞬間、冬馬は呆けたように口を開けていた。

とほけるつもりだなと瞬時に看破した私は、そんな冬馬に構わず続けた。

「死ねば秋ちゃんが喜ぶと思ってるの!？ アンタの独りよがりで秋ちゃんは自分で死ななきゃいけないったのに、アンタは…冬馬は自分の罪悪感を無くしたいがためにまた独りよがりですうってわけ!! ふざけるのも…いい加減にしてよ!」

思考が全て赤に染まり、夏希の考えのまとまらない勝手に出た言葉が広い屋上に響き渡った。

「冬馬が死んだら…私も悲しいし、秋ちゃんも…絶対悲しいんだよ……」

叫びきったあと、ここまで全力で走ってきた疲労からか、足が支えを失い夏希はその場に崩れ落ちた。目から零れた雫は、乾いたコンクリートに染み込んで消えた。

「は？ 夏希？ お、おい、泣くなって」

「う…る、さい…。冬馬の、せ、いでしょ…」

止めどなく涙を流す夏希に、冬馬は目に見えて狼狽えていた。

それでも、冬馬は依然として訳が解らないという顔をしていた。

「ていうか、死ぬ？ 何のことだ？」

冤罪をかけられた人のように、冬馬は慌てた様子で私に問うた。

「ひっぐ、だって、っぐ、冬馬が死ぬって、うっぐ、おも、て…」

「え？」

「…え？」

冬馬の気の抜けた顔と言葉に、夏希は一瞬涙が止まった。

次いで、彼女の思考は全て羞恥にシフトした。それも、全てが塗り替えられる勢いで。

「…えーっと確か『いい加減にしてよ!』だったけか？」

「ああああああ!! 忘れて! お願い忘れてください!」

しばらくして、夏希たちはいつもの屋上入口付近へと移動した。

結局、冬馬が自殺しようとしていたのは夏希の勘違いだったことが判明した。

冬馬の釈明も誤解を解く要因となったが、夏希が気づいたのは冬馬の表情だった。夏希自身、今まで死のうとしている人には会ったことがなかったので自信はないが、冬馬の呆けた顔は誤魔化そうという意志など微塵もなく、自ら命を絶とうとしている人間には到底見えなかった。

「あ、あとなんだっけ。ああそうそう『私も悲しいし…』だっけ」

「あああああああもう! だから言うなあ!!」

そうして今現在、夏希はこのようにさっき口走ってしまった言葉の数々を、丁寧に声マネまでして復唱されている。

「あー笑った笑った。もう腹痛え」

「まったく、本当にいい加減にしてよね…」

冬馬は苦しそうにお腹を押さえて笑いをかみ殺している。夏希はとうとこめかみがびくびくと痙攣するのを止められない。

さっきの緊張していた状況とは一変して、何とも気の抜けた雰囲気になってしまったが、夏希はどうにも腑に落ちなかった。冬馬の決心というものがまだ気になっていた。

「本当に…自殺しようなんて思ってないよね…？」

真剣な夏希の質問に、

「バーカ。んな訳ないだろ。…もっとも、秋は俺を恨んでるかもしれないねえから、喜びはするだろうな」

「またアンタはそんなこと言う…」

小さく笑ってはいるものの、取りあえずは安心できた。

それでも、夏希には秋が冬馬を恨んでいるかもしれないというのは、何故か否定するのがはばかられた。

「じゃあ、昨日言ってた決心のことは？」

流石にこれまでも冗談だと言われては、ここに来た意味そのものがないのだが、気になりはするので訊いてみると、冬馬は溜息をつき、ポケットから四角い何かを取り出した。

「これって…手紙？」

冬馬は夏希にそれを手渡し、頷いた。

「秋宛の手紙だ。俺の精一杯の誠意と、謝罪と」

ここに至って冬馬は恥ずかしそうに頭を掻き、

「秋のことが好きだったってことを詰め込んだ。まだ、一回も墓参りに行けてないんだ。それを渡すための、な」

「そう、だったんだ…」

それを聞いて、本当に自分の過去を夏希以外の誰にも打ち明けていないことが実感できた。そして、冬馬も前に進もうとしているんだなと思った。

「きっかけが女々しいよな。墓参り一つにこんなウジウジしてさ。しかも手紙まで…」

冬馬は夏希の手から封筒を取ると、自嘲気味に笑っていた。

「女々しくなんか、ないよ」

夏希の言葉に、冬馬は少しだけ目を見開いた。冬馬の目には、今にも溢れそうなくらいのものが溜まっているのに夏希は初めて気がついた。

「過去を引きずってるってことは、それだけ秋ちゃんが亡くなったことが悲しくて仕方なかったし、自分を責めてるってことでしょ？ それに、人間ってのは誰かを覚えるより忘れる方が得意なの。それがもういない人なら、尚更前に進めるから。でもアンタは今までずっと忘れなかった。自分のせいで亡くなった秋ちゃんを弔おうとする勇気があった。これって、中々できないことじゃない？」

夏希自身、到底似つかわしくない言葉だろうなと思いつつも、なんとか言い切った。

今夏希が冬馬を責めないのは、冬馬のことが好きだからではなく、秋に謝ろうとする冬馬を、一人の人間として見た感覚からだだった。

「お前……」

夏希を見ながら冬馬はポツリと呟き、

「よくそんな似合わないこと言えるよな」

次いで、大爆笑した。

——こいつは本当に……いい加減にしてほしい。と、夏希は青筋を浮かべる。

「何よ！ 折角人が厚意で励ましてやってんのに!!」

「いやだって、ふひっ、マジ、でふぐ、似合わなっ……！ ああ腹痛え！」

さっきよりも大声で笑っている冬馬に、夏希は想像を絶する怒りを抱き、今にも爆発しそうになっていた。

——少しは素直になるかと思いきや、見事に期待を裏切りおって——

「……まあ、元氣出たわ。ありがと……な」

小さくそう言った冬馬の顔は、少し赤くて、それにつられて夏希も顔が熱くなるのを感じた。

「ば……別にそういうアレで言ったわけじゃないのよ!? しおらしいのが冬馬らしくなかったってゆーか……。うん！ そんな感じだから！ 勘違いしないでよね！」

悲しいかな、素直になれないことが夏希の悪いところというのだろうか、思っていることとは裏腹な言葉を返してしまったが「おう」とだけ言った冬馬は、暖かい笑顔を浮かべていた。

それを見ていると、夏希も幸せな気分になった。

「んじゃ、ちょっとくら行ってくるか」

立ち上がり、大きく伸びをする冬馬は言った。

学校はどうするのなんて疑問は、サボり魔な冬馬には今更なことだと思いつながら、夏希は溜息をついた。

このことに関して、自分ができることは何もない。当たり前だが、純然たるその事実には夏希は少し悔しくもあった。

「いってらっしゃい」

その代わりに、言葉を贈った。既に歩き始めていた彼の背中からは、夏希にとって少しだけ遅しくなったように見えた。

「——いって、きます」

少し間を置いて、冬馬は言葉を返す。それがこれからまた進み始めるといふ決意と、またここに戻って来るといふ、彼なりの表明なのであった。

冬馬はまだ、秋ことが好きなのだろう。

多分、秋もまた同じ気持ちだろう。

でも夏希は、諦めたわけじゃない。諦めが悪いというところも、彼女の良い……悪いともとれる特徴のひとつだ。

「覚悟……しててよね」

そう呟き、冬馬と、そして顔も知らない秋に……、冬馬が好きな女の子に、実に晴れやかに笑いながら、小さく宣戦布告をした。

上を見上げると、どこまでも青い空が広がっていた。

そんな夏希が、今まさに終業式の真っ最中だと気が付くのは、あと三十秒くらいはかかるだろう。

(文学部文学科一年)

天空楽園 Y is N's doppelgänger.

眉 口 心 一

天空楽園は、地球上に作られた人工の楽園である。楽園では生存権が確保され、人々は労働の義務から解放された。地表から二千メートルの場所に作られた天空楽園は、その個数が国の豊かさを表した。国が豊かなだけ、天空楽園は作られた。下界と天空楽園は、エレベーターでつながっていたが、地上と楽園の間に中間地点はない。エレベーターのボタンは上と下の二つだけだった。天空楽園は、国家の在り方だった。ビジネススタイルとさえも言えた。最も効率的で安全な構造だと、世界は判断した。

下界の人間が肉体労働を行い、またエネルギーを生産し、天空の人間が、それを消費する。エレベーターは厳重なセキュリティで守られ、故に、天空の人間に、下界の人間の言葉は響かない。下界の人間と、天空の人間を分けるものは、身分でもなく血筋でもなかった。そのようにして、天空に住む人間を選定する国もあったが、この国では違っていた。

二つを分けるのはただ、金を持っているか、いないかの差だった。ただ、それだけだった。

「ヨウダイ。また、そんな安っぽい服を着て」母は、ヨウダイが久しぶりに実家に顔を出したとたん急にそんなことを言った。「ほら、これでもっと良い洋服を買いなさい」母はお金を渡す。「いや、いいよ。母さん。服なんて、着られればどれだって一緒さ」ヨウダイは、テーブルに座った。

「全く……」母もテーブルに座った。「マキノさん。お茶を出して」

マキノ、と呼ばれた女性の右腕には、ブレスレットが巻かれている。彼女は下界の人間だった。家政婦労働のために、こうして、天空楽園に来ることを許可されていたが、ブレスレット型の端末で常に行動は監視されていた。

感情なき家政婦は、機械的な動作でお茶を運んできた。

「ありがとう」ヨウダイは言った。

「新婚生活は、どう？」母はヨウダイに聞いた。「ハルカさんとはうまくやっている？」

「そのことなんだけどき。母さん。僕しばらく、出張に行くことになったんだ」ヨウダイは茶菓子を食べる。「第二天まで一週間」

「第二天空、ねえ。……まだ若いからね。色々経験させてもらいなさい」

「うん。そのつもり」

ヨウダイは、労働の義務なき天空で就職していた。ここでは職業は生きるための手段ではなく、趣味のための準備に近かった。お金を稼げば稼ぐだけ、よい生活が出来る。

ヨウダイの父は会社を営んでいた。その修業のため、彼は三年ほど、別の会社に勤めて、社会勉強をしているところだった。

「でも、そこそこ稼いでいるんでしょう？　なおさらその身なりをちゃんとしなさいよ」

「かあさん。このブランド知らないの？　安くて、そこまで生地も酷くない。コスパがいいんだよ」

「知らないわよ。少なくとも、すぐくダサイわ」

そうかなあ、と言いながらヨウダイは、鞆の中から、何かを取り出した。

「なにこれ」

「まあ、手ぶらで来るのもあれだったからね。一応おみやげだよ」

「まあ」母は両手を口を持ってきた。「少しは気が利くようになったのね」

「少しはって……」ヨウダイは苦笑した。「ハルカのお陰だけどね」

「おーい。そこから先は立ち入り禁止だぞ」ナオキは声を張り上げて言った。「放射線が漏れ出している」

「えー。兄ちゃん。だって、向こうにボールが行ってしまったんだもん」ナオキを兄と呼ぶこの少年は、ナオキの本当の弟ではなかった。「あれ、最後のやつだったのに」

ボールはフェンスの向こう側にいったらしい。フェンスには警告の表示が貼られていた。この辺は草木一本生えていない荒野だった。放射線の影響だけではない。天空楽園が日光を遮っているからだ。

このフェンスの向こうには捨てられた原子力発電所がある。特に事故があったわけではない。数百年で寿命が来る原子力発電所は、使用に耐えなくなると、こうして土地ごと捨てられる。これが、頭の良い人が考えた効率の良さだった。

「また給料が入ったら、買ってやるよ」

「でも……」少年は不満そうな顔をしたが、それ以上は何も言わなかった。

ナオキは少年の気持ちがよく分かった。遊ぶことより大切なことなんて子供にはないことをよく知っていた。

「それよりも、飯にしようぜ」ナオキは、励ますように笑った。

「うん」

ナオキも、この少年も孤児だった。ナオキはこの辺の孤児を集めて十数人の集団を形成していた。

二人は、場所を移動した。

「おい。兄ちゃんが帰ってきたぞー」家の前に座っていた少年が手を上げた。さっきの少年とは別の少年である。

下界では、高さ四メートル以上の建造物が規制されていた。例外は、発電所やその他の公営施

設だけだった。

建物と建物の間には電線が、蜘蛛の巣のように入り乱れ、いつ火事になってもおかしくない状況だった。皆それを知っている。しかし、散らかっているものがさらに散らかることはあっても整理されることは決してなかった。

そんな電線から、ナオキたちも電気をもらっていた。とはいっても電球が一個つくだけの電力しかない。

「ねえ。ナオキ兄ちゃん。今度、上手な逃げ方を教えてよ。ああ、あと、盗み方も」

「また今度な。あと、そういうことは外では話すなよ。」ナオキは少年を諫めた。「……メシは出来上がっているのか？」

十畳ほどの家には、ただ、柱と屋根があるだけだった。家の中で火をおこし、遠くで水を汲む。当然水道もガスもなかった。

「二今日のご飯は、野菜のスープだよ」「三」まるでエコーのように四人の子どもたちが声を揃えて言った。食事は当番制だ。

子供達の声が、がやがやと家中に響き渡った。それは彼らの未来が希望だけが満ち溢れているように錯覚させた。自分はあるあいう声や表情はもう出せないのだからなと思うとナオキは悲しくなった。いつからだろう。どんな楽しい時間にあっても自分を客観的に見てしまうようになったのは。

「ねえ。早くご飯食べようよ」子供達はナオキの髪や手を引っ張った。

「もう少し待て、マイが帰ってくるまでな」

もう少しで、工場での仕事が終わるはずだった。工場は三交代制で、ナオキはマイとシフトがずれている。

「ただいまー」しばらくして家に帰ってきたのが、ナオキと同じく働きに出ているマイという女性だった。彼女はナオキ達のグループの中で、ナオキに次いで年長者だ。彼女だけが、ナオキのことを『兄』と呼ばない。

「おかえり」ナオキが言い、「おかえり」少年達が声を揃えて言った。

「今日はね。コロッケをもらってきたよ。社員食堂から」マイは、綺麗にたたまれた紙の中からコロッケを取り出した。

子供達の眼の色が変わった。

ヨウダイは会社に出勤していた。そこそこの値段のスーツ。そこそこの値段の時計。そこそこの値段の靴。そこそこの値段の情報通信端末。それらを身につけていた。ヨウダイは周りの人間に比べたら多少みすぼらしかったかも知れない。少なくとも、身なりを気遣う人から見ればそう見えたらう。だがヨウダイは気にしなかった。すべてのものはその機能さえ満たしていれば十分であると考えていたからだ。例えば時計に、時間を示す以外の機能は必要ではない。

「おはようございます」オフィスに入ったヨウダイは快活に挨拶をする。中にいる数人から、軽く返事がある。

自分のデスクに着き、パソコンを起動させる。パソコンが起動してから、彼の業務が始まる。キーボードを叩き、モニター上に表れる数字を眺める。この数字を理解、分析し、適切な処理をするのが、ヨウダイの仕事だ。その処理というのも、キーボードを叩くだけで終了する。

「頭脳労働するのは肩が凝るな」ヨウダイの隣の席に座る同僚が言った。「俺なんてこの仕事はじめてから視力がかなり下がったぜ」

「僕の場合は、そんなこと言ってもらえない」ヨウダイは無表情でモニターを見つめていた。「家族を養わなくちゃいけないからね」

「うえ。マジで言ってるの？」同僚は、片方の目を細め、口を広げた。「働く必要なんてないんだよ。俺達天空の人間は」

「じゃあどうして君は働いているの？」

聞かれたこと自体が嬉しいかのように同僚は語る。「欲しい車があつてな。流星にベーシック・インカムだけじゃ買えないからな」

「じゃあ、車を買ったら仕事をやめるの？」

「そりゃ、しばらくは休職だろうな」同僚は、まるで今日が何年何月何日か突然聞かれたかのように答えた。「で、また欲しいものがあつたら復職する。普通、そういうもんだろ？」

と言うかお前家族いたんだ、と同僚は意外そうな顔をした。

天空楽園は常日頃から人材不足が激しい。また、天空楽園の人間は、レベルの高い教育を受けているから、安易に下界の人間を雇えば良いというわけではなかった。

「それに僕は、会社を継がなくちゃいけないから」

「ああ。そういえば、そんなこと言っていたな。いいよな。社長なんて、一種の王様みたいなもんどもんな」

「そうかな」

「そうに決まってるだろ。うちの社長もお前には期待しているみたいだったぜ。今度の出張だって、お前みたいに若いときから行けるやつは珍しいんだ」

「それは、まあ、ありがたいとは思っているけど……」キーボードを打つ手が止まった。「あれ？もしかして出張、行きたかった？」

「……あ。ああいや。ほら。あれだよ」

ヨウダイは首をかしげた。

「ただで他の天空に遊びに行けるようなもんじゃん」

千人体制で稼働する工場には換気扇が四つしか付いていなかった。三日前の空気が未だそこに停滞しているような気がした。工場の壁と屋根はトタンで作られていて、雨の日には所々から漏りがする。本気でぶつかれば壊れてしまいそうだった。

「はい。働けよ」ムチを持った無気力な男性が、ナオキの後ろを歩いている。彼は天空の人間だ。噂では彼は下界で働くという理由で特別に、手当が出ているらしい。

他の工場でもこのこと同じように天空の人間が監督役を務めて、下界の人間が汗と油にまみれて

働いている。ここは洋服を作る工場だった。全く同じ「サンミドル」と胸に刻印された洋服やズボンが次々に仕上がっていく。

ナオキは、ここで、機械の不調を直す仕事をしていた。すでに今日だけで十箇所の不具合が報告されており、十三箇所の不具合が修理待ちの状態になっている。

「おい。はやくしてしまいましょうね。工場が止まってしましますよお」ムチを持った男性が、ナオキの元へとやってきた。

「やっていますよ」ナオキは手を止めることなく言った。「そう急かさしないでください」

「口答えするなあ」男はナオキではなく、近くで作業をしていた女性にムチを打った。「お前らの代わりはいくらでもいるんだからな」

女性小さな悲鳴を上げた。工場にいる皆がそれを見ていたが、見ていただけで何も言わなかった。こういったことは日常茶飯事で、ここではムチで打たれたことのない人間のほうが少なかった。皆、監督者に怯えて暮らしていた。歯向かう力も、気力もなかった。

監督者は、ムチを打ったことに対してなんとも思っていないかのようだった。働きが悪ければ、ムチを打つ。ただ機械的に同じ動作を繰り返すだけだった。彼は、歩いて何処かへ行こうとしていた。こんな監督者が必要なのだろうか、ナオキは考えた。考えれば考えるほど苛立ちが止まらなくなった。

ナオキは舌打ちをした。監督者は自分にムチを打たず、女性にムチを打った。つまり、そういうことだ。ナオキのように機械を直せるだけの技術を持った人間はそうでない人間に比べて少な

い。希少価値が何より大切であることを、ナオキは知っていた。だが、この工場を離れても給料は一緒だろう。どこも示し合わせたように、給料が同じだった。実際話し合っているに違いない。

ナオキは機械を弄る手を止めた。胸のうちから湧き出る苛立ちを発散させたかった。

監督者はナオキに背を向けていた。ナオキは監督者に近づく。足音をたてない彼の歩みに、監督者は気づけなかった。

「ん？ なにか用か？」監督者は、何の気なしに振り返った。真後ろにナオキがいた。

「いえ」ナオキは両手を上げて言った。

「じゃあ。手を止めるなあ」監督者はナオキにムチを打った。ナオキの腕に当たり変な音がした。

「さっさと修理をしろお」

ナオキは腕を抑え、痛いふりをして持ち場に戻る。彼が着ている作業着の長袖の中には、監督者の財布が入っていた。

「後ろポケットっていうのは無防備すぎるんだよ」ナオキは少々上機嫌になった。ナオキは、手先が器用だった。機械の修理に比べたら、精密さを必要としない分、スリのほうが簡単だった。

監督者は決してナオキの犯行であると気が付かないだろう。下界では盗られたものは決して返ってこない。それに、この工場に監視カメラなんていう上等な物があるわけがない。無いほうが事故が起こった場合、それを隠蔽するのが簡単だからだ。

ナオキは、このお金で、昨日無くなったボールを買ってあげようと思った。

「……ゴホッ」どこからか、咳が聞こえた。気が付くと、そこら中で咳の音がする。そういえば、

皆、体の調子が悪そうだった。

皆、命を削って、服を作り、お金を稼いで命を繋いでいる。ナオキにとってそれは不思議なことではなかった。どんな生物だって、生きるために生きています。食料を手にするために、反対に食われないために、生物は生きています。

ナオキが許せないのは、そんな俺達の命を食らって高みで生きている人間がいることだった。

「ただいま」ヨウダイは、自宅の扉を開けた。ハルカと二人で住むために半年前買った新居である。

「おかえりー」奥のほうでハルカの声がする。夕食の準備をしているのだろう。

リビングに足を運ぶとハルカが夕食を運んでいるところだった。

「まだある？」運ぶものが、という目的語が抜けていたが伝わった。

「いいや。これで最後。ちょうどよかった」

二人は椅子に座り、手を合わせ、いただきますと言って箸を取り、食事を始めた。

「そういえば今日母さんに持って行ったおみやげ、すごく喜んでいた」

「でしょう？ やっぱ、手ぶらっていうのより、ああやってちょっとでいいからなにか持っているだけで違うんだよ」

「無駄だと思うんだよね」ヨウダイは冗談を言う口調で言った。「プレゼントってさ。誰かに買ってあげて、次に、お返しをちょうだいっていう感じで、さ。最初っから自分が欲しいものを自分

で買えばいいと思うんだよ」

「ひねくれているなあ」夫の馬鹿な持論には特に耳をかさずに、ハルカは副菜に手を付ける。「ああ、このかぼちゃおいしく出来てる！」

「ハルカのお陰って言ったら、母さん微妙な顔していたけどね」そういうとハルカの箸は止まった。

ハルカも嬉しそうな、やらかしてしまったような微妙な顔をしている。

「なんでそういうこと言っちゃうかなー。私の株は上がっていいけど。けど、あなたの気持ちっというのが重要なのに」

「ははは。そんなの偽りじゃん」

「酷いっ」再びハルカは箸を動かし始めた。「——まあそれよりもさ。そろそろ、出張でしょ？荷物はまとめているの？」

「大体終わっているよ」

「ヨウダイってさ。旅行とか行く時に荷物多くなるよね。あれって何でだっけ」

「そりゃ。向こうで同じやつを買うのもったいないじゃん」

「もったいないって……重い荷物を運ぶのきつくないの？」

「きついかもしれないけど、準備不足で不要な高いものを買うよりは全然良いかな」

「買うのは、いつも安いものばかりだし」

「安いんじゃない。コスパがいいと言ってくれ」

「コスパが良いって……いいものを買おうと思わないの？ 例えばいい車が欲しいとかさ」

「ないなあ」

「骨董品が好きとか」

「ないんだよね」

「実はギャンブルにハマっているとか」

「それ、ハマったら大変だよね」

「最近買った高いものは？」

「この家だよ？」勝ち誇ったような顔で、ヨウダイは言った。

「それなし」ハルカは、呆れた顔で言った。「次点は？」

ヨウダイは腕を組んで考えこんだふりをした。本当は、その答えはすぐに出てきた。半年前にハルカと結婚してから、お金がかかったもの、その五位までをすべて思い出せる。

家について言えばハルカにも少しお金を出してもらったから、ああズバリと言えたが、それ以外言うべきではないだろう。ヨウダイはひねくれたことを言うのが好きだったが、直接的なことをいうのは——自分の本心をさらけ出すのは苦手だった。

ヨウダイはハルカに悟られないように、彼女の左薬指を必死に見ないようにしていた。

「また盗んだでしょう？ 正直に言いなさい」部屋の端っこで、マイは三人の少年を叱っていた。この部屋の隅は少年達の間で説教部屋と呼ばれていた。簡単な仕切りで区切られていた。「ま

たあいっら説教部屋にいる」と叱られていない少年達は笑っていた。「うるさい」と仕切りの中から、マイが大声を出した。家の中に一瞬静寂が訪れた。

「違うよ……。盗んだんじゃないよ」右側に正座する少年はうつむきながらやっと答えた。

「拾ったんだよ……」真ん中の少年が言ったが、それは嘘だった。

彼らは店頭にあるボールを盗んだ。窃盗罪は子供であっても適用される。

「こんなに綺麗なボールを拾ったの？」マイは右手に問題となっているボールを持ちながら言った。

昨日この家にあるボールは全部なくなったはずだった。その事実はマイの耳にも届いていた。それが今日ちゃんとしたボールが、しかも新品のボールが家の中にあっただのである。マイはすぐに感づいた。この子達が間違いを犯したということに。

少年達は、再び黙りこんでしまった。マイは息を吐き言う。「正直に言いなさい。それでボールを返しに行ったら、許してあげる」

「……………許してくれなかったら？」左側の少年が言った。

「夕ごはん抜き」

少年達はまるでこの世の終わりのような絶望的な顔をした。マイはやや心苦しくなったが、心を鬼にすることに決めた。

「ただいまー」ちょうどその時、ナオキが帰ってきた。「ん？ ああ。説教部屋を使っているのか？ 大変だな。今日のご飯はなんだ？」

そんなナオキの声を聞いた瞬間、説教部屋の少年三人の目に希望の光りが点った。味方が現れた、と思ったのだ。

「おー。どうしたんだ？」ナオキは区切りの上から首を出し、説教部屋の中を覗いた。彼はすぐに状況を悟った。「ま、まあ頑張ってくれたまえ」

ナオキは窃盗に関しては強く言えないところがあつた。彼自身小さい頃からものを奪って生きてきたし、この子らに盗みを教えたのも実はナオキだった。少年達は、「バレたら、これは拾ったんですと言え」というナオキの教えを忠実に守っていた。

ナオキが助けてくれないところを見ると少年達の視線は再び、マイに戻った。マイの視線もまた子供達に。四人の首の動きはまるで噛み合った歯車のようだった。

「とにかく、正直に言わないと、今日は晚ごはん抜きだからね。盗みをするような子に食べさせるご飯はありませ……」

「あー！ ナオキ兄ちゃん。財布を持ってきている。盗んだんでしょー」説教部屋の外で少女の声が聞こえた。続いて「馬鹿！」と言って黙らせようとするナオキの声が聞こえた。

マイは頭を抱えていた。説教部屋をもう少し大きくするべきではないかと、考えた。

そういう、いつもの光景があつた。しかし。

「あーもしもし」家の外からここで聞くはずのない声が聞こえた。

ナオキとマイが応対する。そこに立っていたのは、今日の無気力な監督者だった。マイは、ナオキの方を見る。彼はまるで我が身は潔白であるという完全な自信があるように玄関にでた。

監督者の後ろには二人の男がいる。ボディガードだろう。この辺は治安が悪いので必要となる。「あのお。ですね。ちょっとお、お尋ねしたいことがございまして」間の長い監督者をマイは不愉快に思った。「ここにはたくさんの子供がいますよねえ。うちの工場で働く気がないか、打診しているところでした」

働くる？ 働いてもいいよー！ と家の中で少年少女達は騒いだ。

「うちの子供達は、まだそちらにお役に立てるとは思いませんので、ありがたいお話ですが、遠慮させて頂きます」マイが両手をお腹の前で重ねて丁寧に頭を下げた。

「ああ。そうですかあ。わかりました。有難うございましたあ」どうでも良さそうに意外とあっさり彼は諦めた。

「何かあったんですか？」マイは聞いた。

「いえね。今日突然、三十人ほど病気で倒れましてえ。どうやら病気が流行っているらしいんですよ。そういうわけで人が足りなくなりましたものでしてえ。もしも興味がある人がいましたら、どうぞお、お伝え下さい」

監督者は、後ろポケットに入った新しい財布を触りながら、次の目的地へ出て行った。

ナオキは拳を震わせていた。

マイが小さく咳をした。

翌日もマイの咳は止まらなかった。微熱も出ている。

「今日は、仕事を休め」横になっているマイにナオキは言った。彼は一晚中眠ることなくマイの側にいた。

「いや。大丈夫。全然平気」マイはそう言ったが、強がりであることは明白だった。「突然休んだら、もう二度と仕事させてもらえないから」

子供達は心配そうにマイのを見ていた。

ナオキはマイを強く止められなかった。ナオキの見通しが甘かったのかもしれない。

「今日は俺も同じ時間にシフトが入っているから、何かあったら言えよ」

「うん」マイは起き上がり、水を飲んで、立ち上がった。体中に力を入れ、壁にもたれかかり、仕度を済ませた。

「じゃあ。行くか」

いってらっしゃいという子供達の声が聞こえた。ナオキはマイの手を取り、共に工場へと向かった。マイはふらふらとしていたが、ナオキに体重をほとんど預けなかった。

二人は工場につき、それぞれ、ただ広いだけの休憩室で、着替えなどの準備を済ませ、工場内に入る。マイは、自分の席に座り、糸を束ねる機械の操作を始める。ナオキは、表に書かれた故障箇所を確認した。

「はい。はい。今日も元気に働きましょうね」監督者は相変わらず無気力だったが、病人がいる分、励ますつもりか、多少声を張り上げて言った。

今日は、昨日に比べて、皆の咳がひどかった。咳が撒き散らした菌がさらに人間を介して増殖

しているような気がした。ナオキには、ここが、洋服を作る工場ではなく、菌の培養をするための場所にしか見えなかった。

ナオキは出来るだけ、マイの近くにしているようにした。マイの遠くにある案件よりもマイから近い案件を優先して処理することにした。

もちろんそれはごまかしのようなものだ。限界がある。

「あのお。機械屋さん」監督者はナオキを呼んだ。「こっちは後でで良いから向こうを直して下さい」

「……わかりました」

「うん。うん。よろしく」

ナオキはさっさと修理を終わらせて、マイの近くにいたいと思った。マイの近くで故障が発生することを祈り、そうしているとマイの咳が、どこにいても聞こえてくる気がした。

「……コホッ」という、大きな咳が聞こえると、ナオキは、マイの方を見た。
(流石に聞こえるわけがないか) ナオキは思った。

しかし、ナオキは決して勘違いをしているわけではなかった。ナオキの頭脳は、マイの咳だけを選択して増幅させていた。

ざわめきが波紋の様に広がった。

——マイがいたはずの方を見ると、マイの姿がなくなっていた。

ナオキは手を止め、マイの方へと向かった。「どけて。どけて。どけてくれ。どけてくれ」

マイは——倒れていた。

呼吸が激しく、白目を向いている。何度も名前を呼びかけたが、反応がなかった。

「はいはい。どうしたんです。手をとめないで下さいよ。——機械屋さん」騒ぎに気付いた監督者が人混みをかき分けた。

「……マイが、マイの命が危ない」

「そうですね。そうですね。休憩室で休ませるか、自宅に帰ってもらうかのどちらかですね。

明日は給料日だったのに残念っすなあ。あー。あー」

ナオキは絶句した。この監督者は、もしも給料日に工場に来なければ、給料を払う気がないのだ。毎日、ほぼ休みなく働かされて、この仕打だ。

もう、ナオキのタガは完全に外れた。彼は監督者に殴りかかった。監督者は、不意を突かれて、ノーガードで顔面に拳が入った。ナオキはマウントポジションを取り、顔の形が変わるほどに何度でも殴り続けた。

二分後にボディガードが助けに入るまで、ナオキを止めるものはいなかった。

監督者は、虫の息だった。死んだのかそれとも病院で適切な治療を受けたのか、もう分からない。どちらにせよ、ナオキは監督者と二度と会うことはなかった。

「飛行機なんて、久しぶりねー。いつ以来？ ああ、あなたは新婚旅行以来かしら？」母は空港に見送りに来ていた。

父とハルカは、仕事に行っている。「わざわざついて来なくても良かったんだけどね」とヨウダイは思ったが、母は、母でなんとなく飛行機を見たいだけかも知れなかった。

「向こうに行ってもしっかりね」搭乗ゲートで、母は、息子の手を握って言った。

「ただの一週間ぐらいの出張なのに大げさだよ。飛行機で二時間ぐらいだし、暇だったらついて来る？」

「そうしようかしら」母は、両手のひらを合わせて、賛成の意を示した。「……冗談よ」

「……うん。じゃあ、行ってきます」ヨウダイは手を振って、搭乗口を通り飛行機の中へと入った。飛行機の中は薄暗い印象を受けた。外を見るための窓が、サングラスのように、黒がかったいるからだ。

ファーストクラスだった。社長が自分に期待をしているというのは本当らしかった。

様々な注意のアナウンスが流れた。そうしているうちに飛行機は離陸した。

ヨウダイは、外側の座席に座った。そして外の景色に目をやった。飛行機が天空楽園の外側にドーム状に包む透明の膜から外に出ると、間もなく見えてくるのだ、小さくなっていく天空楽園と、気が付くとそこにある下界の姿。何度でも見たくなる。

天空楽園を包むこの膜のおかげで、天空楽園内の空調は整えられ、天気すらも人の手で調整できた。航空機の離着陸の際にはこの膜の一部が、開くようになっていた。

完璧なシステムだった。この時までには一回の事故さえ発生していなかった。

ヨウダイの体が浮いた。

この日天空楽園は、設立以来最大の事故を発生させることになる。

ナオキはマイを抱え工場から逃げるように外に出た。すぐに家に帰った。子供達に水を汲みに行かせ、全財産を出して薬を買いに行かせた。ナオキはずっとマイの手を握っていた。

しかし、マイの目が開くことはなかった。徐々に彼女の体は冷たくなっていった。

子供達のうち大きな子達は、泣いていて、小さな子達はただ静かになった。

「運ぼう」ナオキは言った。彼は、子供達の兄を演じることに精一杯だった。嫌でも蘇るマイとの思い出を必死に押し込めた。「一番良い所に埋めてやろう」

子供達と共にナオキは、マイの体を布で丁寧に包み、ナオキが知る一番良いところに向かった。全員でマイの体を運んだ。手を触れているだけの子もいたが、その行為自体に意味がある気がした。

「うわっ。明るーい」子供達のうちの一人の少女が言った。彼女は、マイと一番仲良くしていた。

ここは、天空楽園の影の端、その丘だった。この小さな丘を下れば、それから向こうには日光が差す。だだっ広いその荒野には、太陽光発電の電池がところ狭しと並んでいた。

日が差すところなんかに住むものはだれもいなかった。遮るものが何もない強すぎる紫外線は、人体に悪影響があることを、下界の人間も経験から学んでいた。

ここも影とはいえ、照り返しの影響がないとは言えない。しかし、もうどうでも良いことだった。

子供達と共に、小さなスコップで一心不乱に穴を掘った。二時間ほど掘っただろうか。やっと一人が入れるほどの大きさになった。

その時だった。

「ねえ。あれーなんかおかしくない？」少年が上空を見つめた。

ナオキも上を見る。小さな点が徐々に大きくなるのが分かった。

上空から飛行機が墜落して来ていた。

近年の飛行機は離陸から着陸に至るまで、オートパイロットだった。空中には障害物が少ないため、自動操作が容易なのである。

だから後の調査でも事故の原因はたまたま偶然、天文学的確率で発生したエアポケットということになっている。——飛行機は突然前後を軸として左に大きく回転した。

機体に大きな衝撃が加わった。ヨウダイは知らなかったが、この時、左翼の半分が、天空楽園の膜にぶつかって破損した。同時に機体は完全に制御を失っていた。

もう無理だと全員が思った。いや、全員ではなかったかもしれない。どうにかなってくれと皆、心のなかで祈っていたことだろう。だが——もはや墜落は避けられなかった。

なぜならすでに機長が、諦めていたからである。

飛行機は天空楽園から落ちて、ナオキたちの目の前の、太陽光発電所に墜落した。ナオキには、

それが偶然だとは思えなかった。もしも神様がいるのなら――。

「ナオキ兄。危ないよう」マイと仲の良かった少女はナオキの後ろを追いかけていた。「爆発が起こるかもしれないよ」

ナオキは、彼女の言葉を聞かずに飛行機の方へと向かった。あと飛行機まで二十メートルというところで、飛行機の右翼の部分で爆発が起こった。ナオキも、様子を見る。十秒ほどゆっくりとした時間が流れた。

「ほら、やっぱり、燃料が漏れ出しているんだ。帰ろうよ。死んじゃうよ」

「お前らはそこにいろ」ナオキは意を決して再び歩を進める。「死ぬにしても俺一人で十分だ」

少女は、黙りこんでその場に立ち尽くした。煙の中に、ナオキは入っていく。ナオキは、腕で口を抑えながら、前へ前へと進んだ。煙を抜けると、客席部分についた。機体の胴体が輪切りのようになっていてその割れ目から侵入する。

中は凄惨な情景だった。墜落の衝撃で、人は様々な圧力を加えられ、バラバラになっていた。シートベルトで下半身と上半身が切断されているもの、前の座席に頭を打ち付けたもの、体が浮いて、天井に体をぶつけたもの。いたるところに血と肉片があった。

安全を確認しナオキは呼吸を再開した。その光景を見ても、臭いを嗅いでも感想は特になかった。ただ、油の匂いがして、少々危険だな、と思った程度だった。ナオキは、前の方へと向かった。前の方の人間が上等なものを身に着けていることを彼は知っていた。

その途中で何処かで爆発があった。状況はまだ安定していない。この飛行機に乗り込んだ下界

の人間は自分以外には、まだいないだろう。しかし、それも時間の問題だ。いずれこの飛行機には、下界の人間が群がってくる。何をするにしても急がなくてはならない。

彼は開けた場所に出た。後ろの階層と比べて座席と座席の間に二倍以上の余裕がある。飛行機の全長を考慮しても、ここは裕福な人々が集まる場所に違いなかった。ここは人が少ない分、死体も少なかったが、受けた被害——肉の散らばり方は後ろの座席以上に酷かった。安全面で言えば、後ろに座ったほうが良かったのではないかと想像した。

彼はとりあえず身近なところに落ちていた腕に巻かれていた時計をポケットに入れた。それから次々に財布や貴金属を手に入れていく。貨物室の方へ向かっても良かったが、やはり本当に貴重なものは、こうして身につけているものだ。身につけられる分、盗るときにも盗りやすい。まるで宝の山だった。これだけあればもしかしたら天空楽園へと行くことが出来るかもしれない。

「う、……、う……」うめき声が聞こえた。

生きている人間がいたのか、とナオキは少々驚いた。この被害の惨状、加わったであろう圧力を考えれば生きているものがそこにあることが不自然だったからだ。ナオキにとって生きている人間がいてもいなくても関係ないことではあったが、生きている人間の方にとっては違っていた。

ナオキが立っている位置よりも後ろにその生きている人間はいた。「た……たすけ……て」その人間はナオキの存在を見て言った。

ナオキとその人間は目が合った。「これは驚きだ」ナオキは思わず呟いた。生存者は腕が折れ、シートベルトが腹に食い込んでいた。運良く、腕を支えた場所が圧力を相殺したのかもしれない

が、どちらにしろ、治療は不可能であるように思われた。誰でも分かる。大量の出血。まもなく死に至るだろう。

「助け……」生存者は掠れた声で言った。

ナオキは生存者の頬に手を伸ばした。「これは、すげえ」ナオキは、驚き歓喜していた。どのような宝石よりも価値が有るものを手に入れた気分だった。

驚かざるをえない。

その生存者は、

ナオキと、

全く同じ顔をしていた。

ナオキは、生存者の持っていたポーチを弄った。この区画にいる人間とくらべてこの生存者はいくらかみすぼらしい格好をしていた。それにしても、下界の人間の服装とは比べ物にならない。ポーチの中には財布やペンや情報端末やパスポートがあった。ナオキはパスポートを取り出す。中を見て名前を確認した。

「ヨウダイか」ナオキはパスポートの中に書かれた名前を読み上げる。「どうやら、神はいるらしいな」

今日からナオキはヨウダイとして生きていこうと決めた。

その時、浮かんだのはマイや仲間の顔だったが「もうあいつらに俺は必要ない」と、彼は言い訳をした。

生存者はすでに死体になっていた。

ナオキは、死体を見た。まだ温かい。だがこの男が蘇生する可能性はゼロだろう。血がどくどくと流れ出ている。

問題は、ナオキが、ヨウダイになった場合、死体がもう一つ増えてしまうことだった。ナオキは、ヨウダイの死体を隠蔽してしまおうと決めた。彼はヨウダイを外に運んだ。まず、ほとんど分かれていた上半身と下半身を切断し服を脱がせ、上半身を運んだ。

「な。なにこれ」子供は驚いていた。色々と信じられないようだった。「え。これ、ナオキ兄？」
「ヨウダイって言うらしい。お前ら。悪いがコイツを遠くに捨てておいてくれないか？」

「「えーどうしてー」」子供達は言い、マイと仲の良かった少女は不安そうな顔をした。

「時間がない」

彼女は渋々、ナオキの言うことを了解してくれた。ナオキは、この死体を捨てる場所に、この前少年がボールをなくした場所を指定した。あの場所だったら、見つかることもないだろう。

さようなら、とナオキは子供達の後ろ姿に言った。

最年長の少女には、ファーストクラスで手に入れた貴金属類を渡しておいた。彼女はそれをどうするだろう。捨てるかもしれない。マイの言うことを聞くか、自分の言うことを聞くか、叶うなら、捨てないで有効に使って欲しかった。

次に、ナオキはヨウダイの下半身を運び出し、近くにいた浮浪者に残った貴金属を渡し遠くに

運ぶように頼んだ。

すでにその時には、多くの下界の人間が貨物室に集まっていた。

ファーストクラスに向かうものもいた。ナオキも再びファーストクラスへたどり着く。これで三回目だ。ナオキは服をヨウダイのものに着替えた。スーツはそこそ上等だったが、同じ階層にいる他の死体が来ているものとはレベルが違うように思われた。ナオキもどうせならそっちが着たかったが、我慢した。

周りにいた物取りの人間はナオキの行動を見て不思議そうな、あるいは見下したような顔をした。「どうしてここにこんな上等なものがあるのに、こいつはあんなしょぼいものを盗っているんだ。見る目がないな」とでも言いた気だった。透けて見えるようだった。

(お前らが拾っているのは、目先の自由なんだよ)

ナオキが拾ったのは永久の自由だった。

ヨウダイ——ナオキは、すぐに救助され、病院へと運ばれた。ナオキは、ただ、はいはい、と答えて担架のうえで眠っていればよかった。ナオキは、ベッドの上で横になっていた。

ドアが開く。男性と女性と医者が入ってきた。まだ、家族以外の面会が謝絶されていた。「ヨウダイ！ ヨウダイ！ ああ、よかった」母親と思しき女性がナオキを抱きついた。

ナオキはただ冷たい視線を彼女に浴びせた。しかしながら心のなかはホッとしていた。この母親——肉親を騙せるかが、最大の難関だったからだ。

母親は息子の無反応ぶりに不思議そうな顔つきをしている。

「残念ですが」母親の後ろで医者と言った。「どうやら、記憶に障害を抱えているようでして、脳にダメージは見当たりませんので、恐らく精神的なものだと思われませんが」

「あ、……、あああ」母は混乱した顔を見せたが、無理やり明るい顔へと表情を変えた。「いいの。いいのよ。ヨウダイ。生きて帰っただけでも十分だわ。私は、あなたの母よ。こっちが父親。本当に生きているだけで十分だわ。これからゆっくり思い出していけばいいし、思い出を作っていけばいいの」

父も母も涙を流していた。

「お父さん。お母さん。ただいま」ナオキは、笑顔を作った。「これからよろしくお願いします」本心からの言葉だった。

それから暫くの間三人は会話をした。ナオキはその一言一言を必死に聞いた。記憶喪失をしているといっても、天空楽園の最低限の常識を学習していかなければならない。毎日何時に起きて、何をして、どこに行くのか、何が手に入り、何が手に入らず、何を好み、何を嫌っているのか。

「あの事故の生存者はお前も含めて三人しかいなかったらしい」父親が言った。「お前みたいに無傷なのは、奇跡だそうだ。本当によかった」

「ニュースの映像をみた？ 近くに、乞食のような人たちがたかっていたわよ。救助が来る前に、貨物室がかなり荒らされたみたい。ヨウダイは、何か取られていなかった？」母が嫌悪する様に言った。

「まあ、大丈夫だろ。こいつは普段からあまり高いものを持ち歩かなかったからな」父は言った。話を聞くと、ナオキはあまり贅沢を好まない人間だったらしい。質素儉約という四字熟語が、会話の中で三回ほど使われたが、ナオキにはどうでもよいことだった。すでに過去のヨウダイという人間の人格はなくなっているし、真似をする必要もないのだから。

しばらくして、父と母と医者、部屋を後にしようとしたとき、別の女性が入れ替わりで入ってきた。年齢から言って配偶者だろう。

彼女は父母に会釈をしてナオキの方を見た。一瞬彼女は呼吸が止まり、目を見開いた。ナオキは自然体を装う。彼女はナオキに抱きついた。彼女はしばらくそのままだった。何かを確かめるようにしていた。

「すみませんが」ナオキは彼女の肩に手をおいた。「僕は、記憶をなくしているみたいで、思い出せないんです。あなたは誰ですか」

彼女はゆっくりと離れて、自分のことを説明した。名前は、ハルカといい、ヨウダイの配偶者であること。結婚してまだ間もないこと。情報端末で彼女は二人で訪れた場所の写真を示した。ツーショット写真ばかりだった。当然、記憶が蘇ることはなく、感想も特になく、写真で見てもヨウダイという人間が、ナオキと見分けがつかないことを確認しただけだった。

それから一か月後、ナオキは退院した。たくさんのテレビカメラがナオキを写そうとしたが彼はそれをすべてキャンセルした。病院にいた一か月の間でさえ、ナオキにとっては天国だった。

身の安全を気にしなくていいし、食べるものにも困らない。食べて眠って、見舞いに来た人々と適当な会話を交わす。さすがは天空楽園だと、ナオキは満足していた。

「どうやらヨウダイは、とある会社に勤めているらしいが、半年間の休職が認められた。

「賠償金を貰えることになったわ」病室にいたある日、母が言った。「事故を起こした航空会社が、賠償金を支払うらしいの。しかもかなりの大金よ」

母は、航空会社が出来ただけ早くこの事件の話を終わらせたからだろうと言った。

「どうやら、天空楽園では事故が起こればお金がもらえらるらしい。

しばらくは遊んで暮らせるだけのお金が手に入ったことになる。

——ナオキはハルカとともに、二人の家に向かっていた。

「どう？ 何か思い出した？ ここが、私達の家だよ」ハルカは、家の鍵を開けた。

ナオキは首を横に振った。

もう、ハルカは悲しげな顔をすることはなかった。この一か月で、こういうやり取りを何回もして、彼女も慣れたのだろう。彼女は、入院期間中、仕事をしているにもかかわらず、母と同じ頻度で病室を訪れた。

「何を飲みたい？」ハルカは肩に掛けていた荷物を降ろす。

「お酒はある？」

「まだ、昼だよ。それに、脳にもあまり良くないかも」

「僕は、よい刺激になると思う」

「仕方ないな」ハルカは言い残したあと、キッチンからワインとグラスを持ってきた。「今日は退院記念日だからね」

「高そうなワインだね」ナオキは椅子に座っていた。

「高いよ。私達の給料の三か月分」

「それは、途方も無い、金額だ」ナオキは目を細めた。

「でも、こういう特別なときに飲まないとね」彼女はグラスにワインを注ぐ。

乾杯をして、ワインを口に含んだ。一口目は、吐き出してしまいそうになったが何とか飲み込む。

「大丈夫？」ハルカはなんともない様子だった。

「大丈夫」ナオキは何度か咳込んだ。「どうやら僕には高級すぎたみたいだね」

「そう？ まあ、ヨウダイは元々、貧乏舌なのかもね。あまり、高いものには興味がなかったし」

「僕が貧乏舌？」

「うん。ヨウダイは昔からね。安いものばかりを買っていたよ。出来るだけコンパクトな生活をしたっていうのも言っていてね。このワインを買う時だって、渋々だった」

「へえ。じゃあ、僕はかなりの貯金を残していたのかな？」ナオキは、入院中ずっと気にしていた質問をした。

「そりゃあね。ケチっていうほどじゃなかったけど、貯金が趣味みたいなやつだったよ。あなたは」陽気になってハルカはけらけらと笑った。

「それはそれは」ナオキはグラスを回した。香りが広がる。良いものだと言われてみれば、確かにその香りには品があった。「良いことだ」

「今のあなたは、どう？ このワインを飲むのがもったいないと思う？」

「いや」ワインの二口目を口に含み、飲み干した。同時に上品というものがどういうものかを理解する。上品なものには理解が必要であることに気がついた。「もったいないとは思わないよ。」

ただ……」

「ただ？」

「今までとっておいて良かったとは思うかな」

それから、ハルカは何度も、帰ってきてくれてよかったということを口にした。どうやら彼女は酔っ払ったようだった。

ナオキとハルカはボトルを一本開けた。ナオキには残すという選択肢も、貯金という概念もまだ程遠かった。

「ねえ。ハルカ。僕の部屋はどこだったかな」

「一緒に行こうか」ハルカは机に伏せて言った。酔っ払って、半分眠っている。

「いや良いよ。場所さえ教えてもらえれば」

「大丈夫だよ」ハルカは立ち上がった。ナオキが肩を貸し、リビングを出る。

彼女の指示にしたがって、ナオキは自分の——ヨウダイの部屋に入った。

「何か思い出したー？」

「いや」

「だよねー」彼女は笑った。

相当酔っているなあとナオキは思った。

部屋の中にどのような物があるかを確認する。ヨウダイという人間がどのような人物だったかを知りたいという自然な好奇心だった。恐らく自分が記憶を失ったヨウダイでも同じことをしただろう。

まず、本棚を見る。人間の生き方について書かれた本が置かれていた。机の上にはパソコンモニター、部屋の隅にはテレビがあった。それ以外にあるのはベッドという特に何も無い部屋だった。

(なるほど、質素儉約ね)

ナオキは次に引出しを開け始めた。最初に目についたのがベッドの下の収納スペースだった。中には全く同じ洋服が五枚ずつ入っていた。

「これは？」ナオキは聞いた。

「あーそれー？ ねえ。今のヨウダイはどう思う？ その洋服好き？ ダサイよねー？」

「違う」

「……ん？」

「違う！」ナオキは大声を上げた。

「え。なに？ どうしたの」ハルカは、酔いが覚めたように、驚き、はっとした。「ヨウダイ。急に」

「どうして、俺は、この服を買ったんだ？」

「え。そりゃ安いからって……」

「安いから……。は、はは……。安いから、だと？ なあ。どうして、この服は安いんだ？」

「え、そりゃ……。」マイは酔った頭で夫の怒りの理由を考えていた。「下の世界で作っているからでしょ。あそこは物価が安いから。どうしたの？ ヨウダイ。どうして急にそんなことを聞くの？」

「そうだ。下の世界で作っているから安い。正解だよ。さすがハルカだ。それが、この世界の真実だよなあ。分かっていたんだよ。今実感した」ナオキは頭を抱えた。しばし葛藤した後、服を破ろうとした。破りにくく本当に丈夫に出来ていた。

——ヨウダイの言う『質素儉約』は、本当は、限りなく高価だったのだ。そうでなくてはならない。ヨウダイは、どうやら人殺しであるらしかった。

ナオキはマイのことを思い出していた。あの下界で最期まで、清らかに、皆が馬鹿にするような綺麗事を貫いた彼女のことを。

この服の安さと、それが天空では正当であるという事実は、マイの命を馬鹿にしているようにしかナオキには思えなかった。

また、これが天空の真実なのだと思った。

「どうしたの？ え？ 本当にどうしちゃったの？」

「なあ。ハルカ。ここにある全部の服を捨ててくれ」ナオキは、掴んだ服を地面に叩きつけた。「そしてもう二度とこのサンミドルの服を買うな」

ハルカは、ナオキに理由を聞いたが、ナオキは黙ったまま、すべての問いに首を横に振った。

「ねえ。ヨウダイ、一つ聞いてもいい？」母がナオキの家に来た。

——数年の月日が流れていた。

下界を平然と見下す人間と、分かり合うことは永遠に不可能だと、ナオキは知った。いくら表層を繕って生活しても、満たされない何かがある。それをナオキは結局、無視できなかった。

だから彼は、復讐することに決めた。

何に？ ——この世界に。

何のために？ ——マイと、ナオキの、世界のために。

ナオキとハルカの家の中には、たくさんの子供達の姿があった。

「確かに、あなたも、ハルカさんも今時珍しく、一生懸命働いているわ……だけどね」母は、やや引きつった顔をした。「こんな……こんな……こんな……あなた、お手伝いさんは要らないんじゃないかしら」

「そう思う？」

「え？ ……ええ」

ナオキは微笑んだ。

母さんらしいセリフだね、と、ナオキは言わなかった。〈了〉

(工学部機械システム工学科四年)

選考を終えて

東光原文学賞総評

選考委員長 西山 忠男

日本という社会で生きることが容易である。人々がそのように思いこんでいる社会の文学に活力がないのは当然かもしれない。

今回の応募作を一通り読んでみてそのような感想を抱いた。昨年パリでは同時多発テロが起き、百三十名の尊い無辜の命が奪われた。欧米諸国のような移民社会では、マイノリティとして生きていくことは、それ自体楽なことではないであろう。パトリック・モディアノの「家族手帳」¹⁾には、フランス社会で生きるための身分保障を必死で求める人々の姿が描かれている。ホームグロウンと呼ばれるテロリストが生まれる背景がそこにあるような気がする。

日本人は世界のマイノリティであることに違いないのに、国内では均質な（と人々が信じ込んでいる）大衆社会を作り上げてしまった。大衆とは、特別な理由から自分に価値を見出すことなく、自分を「すべての人」と同じだと感じ、しかもそのことに苦痛を感じないで、自分が他人と同じであることに喜びを感じるすべての人々のことである、とオルテガは定義した²⁾。小中学校でいじめがはびこるのもそのような大衆社会の反映かもしれない。異質なものは排除される。排

除される方に非がある。日本はそのような窮屈な社会になってしまったようだ。文学からそれを打破することはできないだろうか。海外文学の近作に目を向けてみよう。

クレオール文学の旗手、パトリック・シャモワゾーの「カリブ海偽典」³⁾を読んで、そこにあふれる原始的生命力、躍動感、自然と人間との調和に圧倒された。この小説のテーマは、抑圧と抵抗運動、そして人類の融和なのかもしれないが、そのことよりも、語られる人々の鮮烈な生き様が何よりも面白い。

ラフィク・シャミの「愛の裏側は闇」⁴⁾は、シリアを舞台にした闘争と愛と一族の歴史の物語である。日本とは全く異なる社会における人々の生き様は、単に感動的だけでなく、私たちに日本社会を見つめ直す新たな視点を与えてくれる。

日本にも力強い文学がないわけではない。たとえば、森敦の「月山」⁵⁾。そこにあるのは、土俗的な文化、風俗とその中で生きる人間。失われた日本人の原点をそこに見る思いがする。

若い人には、多くの書を読み、世界を広げてほしい。多様な文学に触れ、そこに描かれている、実にさまざまな人々の生き様と社会のありように触れてほしい。そこから、自分の生き方と日本という国の在り方を見つめ直してほしい。小説を書くという行為は、そのような営みから生まれるだろう。

今年の応募作には身辺雑記の類と空想未来小説が多かった。人間と人生を見つめる目はどこにあるのだろうか、と訝しく思う作品が多かった。身辺雑記が悪いという訳ではない。たとえば、久

野啓介「宇土半島私記」⁶⁾は正に身边雑記であるが、そこには世界の広がりがある。人生を深い所で見据えるまなざしがある。それが心を打つのである。そのようなことも読書を重ねることですぐと理解されるだろう。

長々と説教じみたメッセージを書き連ねたのは、今年の応募作品の質にささか危機感を覚えたからである。大賞に値する作品は見当たらず、今回初めて大賞授与を見送らざるを得なかった。優秀作品として選んだ四作品についても、選考委員全員が一致して推薦された作品は一つもなかった。本を読む人すら少ない学生さんたちの中で、折角努力して作品を書いてくれた応募者の皆さんに、このような辛口の総評を書いて申し訳ない。皆さんの努力を思えばこそそのコメントだと理解して、今後の作品の参考にしていただければ幸いに思う。

「海の泡に消える」は応募作品中、唯一といっても良いくらい、小説らしい小説であった。夢の世界、海、それを取り巻く自然の情景描写が優れている。いつの時代のことか、どこの国のことかも分からないが、それがかえって小説としての魅力を増している。少女の名アキアは水を意味し、主題の海と通じて、儚さの象徴のように思われる。しかしこの小説の主題は何だろうか？ 没落する家族の中で異質な存在となったゆえに家を出て一人で乞食になる道を選んだ主人公の孤独？ 病気になる少女アキアをめぐる葛藤？ 死を意識していた主人公の、リーダーとの出会いによる生きる意志の復活の物語？ 作者の意図が今一つ分かりにくい。作品全体を通奏低音のように流れるニヒリズム。しかしそれからの脱却がリーダーとの出会いというのは、やや陳腐である。

「天空楽園」は空想未来小説であり、作者の空想力が感じられる。ストーリー性があり、ある程度面白く読ませるところは評価できる。主題には階級差別のメタファーとしての意味が認められるが、やや皮相的でステレオタイプな描き方になっているのは残念である。最後の一節（ナオキが復讐を決意する場面）は何を言いたいのか、分かりづらい。結局、作者はこの作品で何を描きたかったのか、何を主張したかったのか、それが不十分な点が残念である。

「リグレット」はあまりに通俗的で幼いと感じ、私は推さなかった。「夏樹」、「冬馬」、「秋」という登場人物の名前の付け方も安易にすぎる。まるでコミックを文章化したような作品だという印象を持った。「椰揄い」などという若者言葉の使用にも違和感があった。しかし、他の委員がこの作品を推したことから、読み手によって作品の評価はずいぶん異なるものだという感想を持った。おそらく、私には理解できない良さがこの作品にはあるのだろう。

「君の部屋」はさらに通俗的な風俗小説と感じられ、私は全く推さなかった。これも読み手によって判断の大きく分かれる作品だった。身辺雑記の域を出ておらず、小説としての奥行きを感じることができなかった。

優秀作品から漏れた作品の中では、私の個人的な判断では次の二作品が比較的良いと思われた。「WANDERERS」。比較的小説らしい作品で、内容も主題も分かりやすく、ある程度読ませる力がある。少年時代と二十三年後の成人時の二つの時期の日記から構成される作品であるが、日記体の中に現在からの回想が含まれているなど、形式的な破綻がある。ホームレスの「オッサン」と少年との出会いと交流、そして突然の別れ。成人後にオッサンと似たような境遇になった

主人公が、オッサンを懐かしく思い出すという単純で感傷的なストーリーで、その点小説としての新味はない。しかしかなりの文章力が感じられ、良いテーマを見つければ、素晴らしい小説を生み出すポテンシャルを作者に感じた。

「十九番目の幻想」。これも空想未来小説である。小説らしい面白さは認められるものの、あまりにも幼い恋物語と言わざるをえない。仮想世界への移行が実現し、永遠の生（肉体を離れての）を手に入れた時代の物語で、そのような生に意味があるのかも問うている作品である。主人公の独白の部分は、文章力があり、魅力的である。ミラとミズキの物語と、シュタインベルク博士とドランの物語で平行して語られるという形式上の工夫は評価できる。ミラが仮想世界で生きているだけの実験体であるという種明かしで二つの平行する物語がつながるのだが、この設定には既視感があり、新味がない。

以上、思いつくままに感想を述べた。優秀作品に選ばれた人はこれを糧に、惜しくも選に漏れた人はこれをバネに、今後の精進につなげてほしい。

- 1) パトリック・モディアノ「家族手帳」（安永愛 訳）水声社
モディアノは二〇一四年のノーベル文学賞を受賞した。そのこと自体よりも、おかげで彼の作品の多くを日本語で読めるようになったことが嬉しい。
- 2) オルテガ「大衆の反逆」 白水Uブックス

- 3) パトリック・シャモワゾー「カリブ海偽典」紀伊国屋書店
- 4) ラフィク・シャミ「愛の裏側は闇」東京創元社
- 5) 森 敦「月山」河出書房新社・文春文庫
- 6) 久野啓介「宇土半島私記」石風社

● 西山 忠男（にしやま・ただお）

熊本大学自然科学研究科教授

岩石学の専門に関わる著作以外に、創作として「オラビ瀬の洞門」（権歌書房、2000
3）、「孤峰の蝶」（文芸社、2004）がある。

講評 書くという動機

選考委員 高峰 武

もう随分昔のことだが、「芸術は爆発だ」と真面目な顔で大声を上げている芸術家がいた。常識にとらわれない作品を発表していたが、独特の雰囲気を持っており、時折、懐かしく思い出す。「芸術は爆発だ」という言い方は少々乱暴な言い方ではあったが、ある意味、芸術の在り方について核心を突いた言い方でもあったと思う。何かを訴えたい、訴えずにはおれないものが心の中に沸々としてある、それを文字にすることで、詩が生まれ、小説が生まれ、つまりは文学が生まれる。文学というものが普遍性を持つのはこのためである。

東光原文学賞の審査の楽しみは、こうした若い作家の誕生に立ち会うことができることであつた。あつた、と過去形で書いたのは、今回は大賞が「該当作なし」となってしまったからだ。極めて残念だ。しかも三人の委員ともこの結論に異論がなかった。このこともやや寂しいことではあつた。独り善がりさが目立つ、その一方で表現が幼い、小説としての筋立てが混乱している、これらはことしの作品に目立ったことのように思う。

そんな中でも、優秀賞を四点選んだ。大賞ではなかったものの、四点はそれぞれに作者の意図が感じられ、特徴のある作品ではあつた。以下、順不同で気付いた点に触れておきたい。

「君の部屋」は恋愛ものだが、先輩の女性が置き忘れたコンタクトレンズを舞台回しにしてス

トリーを展開しており、無理なく読ませる作品となっている。若者の風俗と男女の関係がやさしい文章で書かれており、全体として好感が持てた。ただ、文字が抜けていたり、表現がやや子どもっぽいところが作品の粗さとなっていた。

「天空楽園」は、未来都市の話である。ここでは人工の空中都市と下界の肉体労働の世界が対比されるが、最後のどんでん返りで世界が一転する。ストーリー性のある小説らしい展開である。ただ、表現のどこどころ月並みな表現があるほか、最後の結末にやや甘さがあるように思えた。「リグレット」は、高校生の恋愛物語だが、主人公の安藤夏希の直線のような性格がうまく描けていてよかった。恋の相手の冬馬といじめで亡くなった秋の描き方にもう少し深みがあれば、もっと味わい深いものになったのではないか。

「海の泡に消える」はややシュールな作品である。物乞いの主人公が見る社会は現実の社会なのか。「日記」というのがキーにもなっているが、これに書き込むことが時間の流れを感じさせる。ただ、リーダーとの出会いなどがもう一つ分かりにくかった。

全体に言えることだが、自分では分かっているのだから、作品として読んだ場合、袋小路に入り込んでいくように思われる作品があった。文学は個性も大事だが、読者の共感もまた大事な要素である。繰り返しになるが、誤字、脱字も単純なミスということではなく、作品を壊してしまうものであることを再認識したい。

●高峰 武（たかみね・たけし）

熊本日日新聞社論説主幹。早稲田大学第一文学部仏文科卒。1976年、熊本日日新聞社入社、1991年東京支社編集部長兼論説委員、1999年社会部長兼論説委員、2005年編集局長、2008年論説委員長、2014年6月から現職。著書・共著に「ルポ精神医療」（日本評論社）、「巨大ダムに揺れる子守唄の村」（新風舎文庫）、「新版 検証・免田事件」（現代人文社）、「検証ハンセン病史」（河出書房新社）、報道写真集「水俣病50年」（熊日情報文化センター）、「水俣病小史」（熊日情報文化センター）、「原田正純追悼集 この道をー水俣から」（熊本日日新聞社）。連載「ルポ精神医療」と連載「検証ハンセン病史」は日本新聞協会賞受賞。

講評

選考委員 坂口 至

今回初めて選考委員を務めることになり、十四編の応募作品のうち八編の小説を読んだ。作品の傾向は、現実的なものと空想的なものが半々であり、いずれも面白く読めたが、個人的には若者の日常を描いた作品の方が好きだった。空想的な内容の作品は、昨今流行りのライトノベルの影響が見られるのではないかと思った。八編の中から一編の最優秀作品を選ぶのが規定であるが、今回は強く推せる作品は残念ながら見当たらなかった。

優秀作品「君の部屋」は、大学生の恋愛をめぐる等身大の姿を描写していて、わかりやすく、好感が持てた。前半を女性の視点から、後半を男性の視点から書き分けている点も面白く感じた。男女の心理描写も他の応募作品よりも丁寧であり、また他の作品にはないユーモアも感じられたが、全体として風俗的作品を突き破る何かが足りないと思われた。

優秀作品「海の泡に消える」は、仮想世界を舞台とした物語であるが、それなりのリアリティがあり、読ませる描写力を持っていると感じた。「日記」が物語展開の重要な役割を果たすという設定が面白い。ただ、空想的作品にありがちな、即物的な人物描写の弊をこの作品も免れていないように感じた。

優秀作品「リグレット」は、高校生の恋愛物語で、主人公の夏希と相手の冬馬の人物造形は類

型的ではあるが、秋とのエピソードを挟むことで、それぞれの心理を巧みに描写できていると感じた。会話文の感動表現に個性的なことばが見られるのも面白い。文体として、常体の中に時々敬体が混じるのが気になった。

優秀作品「天空楽園」は、空中都市に住む何不自由のない人々と、下界に住む貧しい労働者たちを対比的に描く空想小説で、前半では両者を交互に描き、いつどのように両者が交わるのだろうかと期待して読ませる力を感じさせる作品である。後半の意外な転嫁も面白かったが、結末の部分が理解しにくかったように思う。

以上の四編以外の作品で気になったのは、内容の展開が予想できる作品や、ひとりよがりの描写の多い作品が見られたことである。

最後に、全体的な感想を述べておきたい。一つは、小説観の問題である。私の学生の頃は、小説と言えばまず「人間はどう生きるべきか」が描かれているものという認識があった。近代日本文学の中でも、特に白樺派の作品を好んで読んでいたのも、そういう認識があったからである。もちろんこれは小説に対する考え方の一面でしかないが、現代の若い人たちの作品の中にも、そういうものが存分に描かれているものを読みたいという気持ち強い。二つ目は、言葉遣いの問題である。日本語の研究に携わっていることもあり、小説の描写に使われることばには、どうしても敏感にならざるを得ない。

今回の応募作品で気になったのは、ある言葉がその文脈で用いるのにふさわしいか疑問に感じられるものが少なからず見受けられたことである。それらは若い人たちにとっての日常語ではな

く、どこからか借りてきたことばである場合が多い。自分の自家葉籠としたことばでない場合は、文字化する前に一旦立ち止まって、用語として相応しいか吟味をしてもらいたいと思う。今回の募集にはさらに多くの人が応募してくれることを期待して、講評の結びとする。

●坂口 至（さかぐち・いたる）

長崎県出身。九州大学文学部国語国文学科卒。現在、熊本大学文学部教授。
日本語史・方言学専攻。九州方言研究会代表（2011～2015）。著書・共著に『九州方言の史的研究』（桜楓社、1989）、『長崎県のことば』（明治書院、1998）、『これが九州方言の底力！』（大修館書店、2009）など。句集（私家版）に『旅次』（2005）、『四季抄』（2012）、『四季統抄』（2013）がある。

第八回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇一六年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷 株式会社かもめ印刷

